

金光明經の教学史的展開について

藤谷 厚生

(平成16年9月30日 提出)

金光明經は、大乘經典を代表する一經典である。従来この經典は、他の大乘經典である『法華經』『華嚴經』などのように、特定の宗派が所依とする根本經典とはなり得なかった。けれども、この經典はインドに成立してより、所謂護国經典として中国・朝鮮・日本・チベット・蒙古などと広くアジア諸国に弘通し受容され、少なくとも近代以前は様々な宗派、多くの学僧によって研究されてきたのも事実である。しかし、近代以後の仏教研究の中では、この金光明經について教学史的展開についての論究は、あまりなされていないのが実状でもある。欧米においては二、三の梵本の翻訳・研究があり、我が国においても、国訳や梵本に関する部分的論究がいくつかあるというのが現状といえよう。

本稿では、教学史的側面に焦点をあて、この金光明經の翻訳、經疏、註釈等の多くの資料を取り上げ、本經についての近世期までの歴史的展開にみられる特性、また特に中国・朝鮮・日本での伝播を地域的変遷を追うことで、その概観を考察しようとするものである。

キーワード：金光明經・金光明最勝王經・山家山外論争・南都仏教

1. はじめに(金光明經の翻訳とその展開)

『金光明經』は、梵名を『Suvarṇabhāṣasūtra』(黄金の光りの經典)或いは、『Suvarṇaprabhāṣottamasūtra』(黄金の最高の輝きの經典)ともいうものであり、古来ネパールでも九法宝典の一として重要視されてきた¹⁾。梵本については、泉芳璟氏やドイツのノーベル氏等による出版本があり、その英訳等もある²⁾。

また、この經典は中国・日本等では、所謂護国經典として尊重されたのであるが、漢訳のみならずチベット語訳、ソグド語訳、ウイグル語訳、コータン語訳、カルムク語訳等があるように、本經は広くアジア全域に弘通していたことがわかる³⁾。

さて本經は、曇無讖が西暦414～421年に『金光明經』4巻18品を訳出したが、これは現存する古

写梵本に最も近いものである。従って、曇無讖訳4巻本が最も原型に近いものと考えられ、その後の實貴合糅訳8巻本、義浄訳10巻本へと、内容においても量的に増加する展開がみられる。もちろん、この經典がいつ頃、どこで成立したかという問題が考えられるが、曇無讖が北涼の玄始3年(414)に翻訳を始め、同10年(421)10月には終えているから、既に400年にはこの經典が成立していたことになる。しかも、讖自身は中部インドの出身であるから、恐らくは4世紀頃に中北部インドで、この經典が成立したものと考えられる⁴⁾。当初4巻本であったこの經典が、わずか数百年の内に10巻本と展開するのであるが、いまここで4巻本から10巻本への内容的変遷に目を向けて、本經の特性を明確にしたいと思う。

奈良時代の学僧常騰の撰述した『註金光明最勝

王経』巻第一の中にある「第二翻経之異」には、
佛法東流時久遠。経本単復難可定實。今據六
本略述雄匠傳經之跡。何為六也。一者四卷二
者五卷。三者六卷。四者七卷。五者八卷。六
者十卷⁵⁾。

とあり、以下これら6本について、各々を説明し
ているのであるが、それらを参考に6本について
まとめると次のようになると言える。

4 巻本、これは先に言ったように曇無讖
(Dharmakṣetra・385～433)が、最初に漢訳したも
ので、18品である⁶⁾。

5 巻本、これは耶舎崛多 (Yaśogupta) が翻訳
したものであり、前記の文に続いて

第二本、即周武帝世。優婆國三蔵法師耶舎崛
多。周云稱藏。共小同学闇那崛多。為大冢宰
宇文護。譯於歸聖寺。出為五卷。分懺悔品為
其二品。長行名為夢金鼓品。偈頌名為懺悔品。
捨身長行名現實塔品故品增二十。加廣壽量大
辯兩品。智僊筆受⁷⁾。

とある如く、耶舎崛多が北周の武帝の頃(560～
578年頃)に、先の識訳18品に対して、「懺悔品」
を(1)「夢金鼓品」と(2)「懺悔品」とに分け、
さらに「捨身品」を(3)「現實塔品」と(4)「捨
身品」とに分けて全5巻20品の翻訳をしたことが
分かる。この5巻本は『金光明更廣壽量大辯陀羅
尼經』と言われるものであり、『開元釋教録』に
は

金光明更廣壽量大辯陀羅尼經第五卷 於歸聖
寺譯。智僊筆受。此五卷金光明經非是今譯。
但於曇無讖四卷經中續壽量大辯二品今在刪繁
録⁸⁾

とあり、また別の箇所にも

周朝稱藏。續演壽量大辯二品分為五卷⁹⁾。

とある如く、「壽量品」と「大辯品」の内容が先
の4巻本より更に広述されたものであることが分
かる。勿論今日では、この5巻本は伝わっていな

いので詳細にはわからないが、耶舎崛多が訳した
梵本は、先の識訳の梵本原典に比べて数品の内容
的な増量が見られるものの、基本的には原典古写
本系に近いものと考えられる。

さて、この耶舎崛多については、『開元釋教録』
に

沙門耶舎崛多。周言稱藏。優婆国人。共小同
學闇那崛多。於武帝時為大冢宰宇文護。於四
天王寺及歸聖寺。譯金光明經等三部¹⁰⁾。

とある如く、後に述べる闇那崛多の兄弟子に当り、
『金光明經』5巻のみならず『十一面觀世音神呪經』
1巻と『須跋陀羅因緣論』2巻の3部8巻を翻訳
している¹¹⁾。

6巻本と7巻本、これらは真諦 (Paramārtha)
の翻訳したものとされるものであり、『註金光明
最勝王經』には、

第三本。梁武帝末世至承聖年。西天竺優禪尼
國三蔵法師波羅末陀。梁云真諦在於建鄴翻三
身分別滅業障陀羅尼最淨地依空滿願等四品足
前出沒為二十二品。卷增成六¹²⁾。

とある如く、真諦は承聖元年(552)に建康に來
り、正觀寺において願禪師など二十余人とともに
金光明經を翻訳したのである。これは、先の識訳
18品に新たに「三身分別品」「滅業障品」「陀羅尼
最淨地品」「依空滿願品」の4品を加えた全22品
の構成であったが、これが6巻本であったかは疑
問である。というのは、前記の文に続いて

第四本即梁武皇帝愍五趣之輪迴。悼四出之沈
沒。汎寶舟以救溺乘慧炬以照迷。大同年中勅
遣慧張記等。仍請名僧及經論等。彼國乃屈西
天竺優禪尼國三蔵法師波羅末陀。梁云真諦。
并寶經論。大清算年始至京邑。武皇躬申頂禮。
於寶雲殿恭敬供養欲翻經論。法師譯經補最淨
地闕以為七卷¹³⁾。

とあるが、ここでは梁の武帝が大同年中(535～
545)に名僧及經論の招請を勅命を出して行い、

金光明經の教学史的展開について

それに対して真諦は南海を経て、大清元年（547）に建康に至り、武帝に謁して7巻本の翻訳を行ったことになっている。しかし、大清元年は承聖元年より5年前となることから、7巻本ができた後に6巻本が訳されたことになり些か不可解となる。ともあれ、この『註金光明最勝王經』巻第一にある「第二翻經之異」に記された金光明經の異訳については、第1本から第6本までが、既に4巻5巻6巻と増数して説明されているものであり、いわば法数项目的に便宜上並べたものであって、少し年代的にも前後した所が見受けられる。

ところで、『合部金光明經序』には

初在涼世有曇無讖。譯為四卷止十八品。其次周世耶舍崛多。譯為五卷成二十品。後逮梁世真諦三藏於建康譯。三身分別。業障滅。陀羅尼最淨地。依空滿願四品。足前出沒。為二十二品¹⁴⁾。

とあり、また慧沼撰『金光明最勝王經疏』に

梁真諦譯者有二十二品。加三身品淨障品最淨地品依空滿願品。除開出者猶少四品¹⁵⁾。

とあるから、とにかく真諦訳は新たに4品を加えた22品であったことは確かである。しかし、これが6巻本か或いは7巻本かに対しては、『開元釋教録』の中に

梁時真諦 更出四品謂三身分別品業障滅品陀羅尼最淨地品依空滿願品通前十八成二十二分成七卷¹⁶⁾。

とあるから、恐らくは7巻22品であったと思われる。また、吉蔵撰『金光明經疏』の中に、「此三種三義具在七卷也。此四卷中大判有三段。」或いは「故云三身常住。如七卷經中明。」とある如く¹⁷⁾、ここで引用されている4巻経、7巻経とは言うまでもなく識訳4巻本と真諦訳7巻本であることは確かであろう。

さて、この真諦訳の経題については、慧沼撰『金光明最勝王經疏』巻第一にある如く、正式に

は『金光明帝王經』という題であったと考えられる。これは、梵名《Suvānāprabhāsottama-indrarājasūtra》の漢訳名である¹⁸⁾。このように、真諦訳7巻本は、先の識訳4巻本と梵名タイトルも違ったものであり、内容的にも別に4品が付加されるなど、原典古写本に対して新たな展開が見られる¹⁹⁾。

8巻本、これは開皇17年（597）に、沙門寶貴等が識訳『金光明經』4巻18品に新たに訳された真諦訳7巻本等より4品を補い、そこに闍那崛多が訳した2品を加えた8巻24品の合糅訳である。『註金光明最勝王經』には、

第五本即北天竺毘陀羅國三藏法師闍那崛多隋云佛德。周明帝世武城年始。共同学耶舍崛多隨本師主。度摩伽陀國三藏禪師闍那耶舍賚經入國。師徒同学悉習方言二十餘年。崛多最善。開皇五年勅旨付司即令崛多共婆羅門沙門等省翻梵本...（中略）...同翻十一年。前崛多自翻。沙門彦琮制序。十二年来在大興善寺。沙門笈多。高天奴兄弟等助沙門明穆沙門彦琮。重勸梵本再更覆勸經二百六十部。其間復有銀主陀羅尼品及屬累品。請崛多三藏共沙門彦琮重覆定勸前四五六卷。皆無此二品故大興善寺沙門釋寶貴。開皇十七年合分為八卷廿四品²⁰⁾。

とある。ここにある如く、闍那崛多（Jñānagupta）は闍那耶舍（Jñānayaśas）の弟子であり、先に述べた5巻本の訳者耶舍崛多の後輩にあたる²¹⁾。

闍那崛多は、後に260部の梵本を持ち帰り、明穆、彦琮等とそれらを整理翻訳したが、その際それら梵本の中に、従来にない金光明經の新本を見出し、そこに記載されていた「銀主陀羅尼品」・「屬累品」の2品を訳出したのである²²⁾。そして、この崛多の新訳の2品と真諦訳の「三身分別品」・「業障滅品」・「陀羅尼最淨地品」・「依空滿願品」の4品を、識訳18品に合わせて、開皇17年に寶貴等によって『合部金光明經』8巻24品が完成したのである²³⁾。

10巻本、これは義浄が唐の長安3年(703)に訳出した『金光明最勝王経』10巻31品である。『註金光明最勝王経』には

第六本。三蔵義浄法師。明晤秀出標奇。於救蟻之年。... (中略) ...長安二年次在壬寅受筆斯經精勤莫輟。至長安三載次在癸卯十月四日修飾畢周。写成十卷三十一品。文圓理具華質得中。始得髻珠同開寶塔。加以二品所謂金勝陀羅尼品如意寶珠陀羅尼品。即開六品所謂四天王觀察人天品。此四天王品開出。吉祥天女增長財物品。此吉祥天女品開出。又補助品之初。四天王品壽量品之末。又廣大辯才天女品及雜説等²⁴⁾。

とある如く、義浄が持ち帰った梵本には、先の8巻24品が完成してより、わずか100年ほどの内に、新たな発展が見られた。特に「金勝陀羅尼品」「如意寶珠陀羅尼品」という陀羅尼中心の従来に見られない2品が付加されており、それまでの「四天王品」「功德天品」がそれぞれ「四天王觀察人天品」・「四天王護国品」、「大吉祥天女品」・「大吉祥天女增長財物品」という2品に分けられ、「讚佛品」が内容的にも増加し、4品に分けられるという大きな展開が見られる。就中「四天王品」と「功德天品」の発展は、この金光明経という經典において重要な意味があり、特に中国や我が国に於いて見られる本經に基づく護国儀礼は、この両品と極めて密接な関係があるといえる。

ところで義浄が持ち帰った新梵本については、『金光明最勝王経疏』に

今者正云蘇跋那娑婆娑鬱多摩羅闍蘇怛纒。蘇跋那此云金。娑婆娑此云光。言光明者遂言便也。鬱多摩此云最勝。羅闍此云王。蘇怛纒。此義云經索經。應言金光最勝王経²⁵⁾。

とある如く、『Suvarṇaprabhāsottamarājasūtra』という従来に見られない經題であり、識譯4巻本の古写本原典に対して、極めて内容も充実した新写本

の梵本であった。また義浄が本經を翻譯するに際しては、『開元釋教録』には

長安三年十月四日於西明寺譯畢沙門波崙惠表筆受²⁶⁾。

とあり、さらにまた

即以久視元年庚子至長安三年癸卯。於東都福先寺及西京西明寺譯金光明最勝王。能断金剛般若... (中略) ...及龍樹勸誡頌。已上二十部一百一十五卷。北印度沙門法寶法藏德感勝莊神英仁亮大儀慈訓等證義²⁷⁾。

とある如く、西明寺に於いて法寶、法藏、勝莊等の学僧が参加していることが分かる。特に、勝莊は本經の註釈をも撰述している²⁸⁾。また、同じく本經の註釈を著した利貞と慧沼は、直接本經の翻譯には加わっていないが、利貞は神龍元年(705)宮中内道場における訳經に、慧沼は景龍4年(710)大薦福寺での訳經にそれぞれ加わり、義浄に直接教えを受けたであろうから、彼らが本經の註釈を書くうえで義浄より少なからずの影響を受けたことは否定できないであろうと思われる²⁹⁾。

さて、以上のように常騰の『註金光明最勝王経』の巻第一にある「第二翻經之異」を参考に、本經の翻譯と經典内容の發展經過について考えてみた訳であるが³⁰⁾、これらを年代順にまとめれば大凡別表1(稿末)の表ようになるであろう。

2. 本經の成立展開にみられる問題点

以上述べたように識譯4巻本から義浄10巻本への大きな内容的展開が見られる訳であるが、就中、真諦7巻本と耶舎崛多5巻本の相違は重要であると思われる。というのも真諦の梵本には「三身分別品」・「業障滅品」・「陀羅尼最淨地品」・「依空滿願品」があるが、耶舎崛多の梵本には、それらがみられないのである。真諦訳は552年頃に完了し、耶舎崛多訳はそれよりもわずかに数十年後になされたものであるにも拘わらず、両者の梵本に

は大きな違いがある。先にも述べたように耶舎崛多は中北インドの出身であり、北方西域を経て中国に渡った学僧である。従って、彼が得た梵本は中北インド、又は西域ルートで入手されたものといえる。これに対して、真諦は優禅尼国(Ujjayini・西インド マーラヴァ地方の都邑)の出身であり、南海経由で渡来したことから、彼の梵本は明らかに南方ルートで入手されたものといえる。もちろん、こういった梵本の入手ルートの相違が、却って同時期の同じ経典での、新たなる思想の導入や展開が、地域的に異なって起こっているという特徴を示しているように思われるが、特に思想的には、この南方ルートで請来された真諦訳にある「三身分別品」と「業障滅品」が重要であるといえよう。この「三身分別品」では、化身・応身・法身の三身論が説かれる訳であるが、識訳4巻本では全く三身論は説かれていない。曇無讖が翻訳したのは420年頃であり、真諦はその130年後に翻訳しているから、わずか1世紀の間に本経が三身論の思想を取り入れている訳である。言うまでもなく、二身論から三身論への思想的展開は仏教学研究のうえで大きな問題であるが、本経が成立・発展するうえで、6世紀頃の南方ルートの梵本には、早くも三身論の立場が導入されていることは、仏身論の展開を考えるうえで重要な手掛かりとなるように思われる³¹⁾。また本経に説かれる中心テーマである「懺悔」(deśanā)という概念に着目するならば、「懺悔品」のオリジナルでは、単に罪過の懺悔のみしか説かれなかつたものが、「業障滅品」では、さらにそこから発展して、懺悔発露することによって、具体的に業障が滅するという《懺悔による滅業の思想》が明らかに導入・位置づけられている点も、本経の思想展開を考える上で重要であるといえよう。

さて次に本経の成立展開の上で注目すべきことは、所謂陀羅尼群の導入についてである。当初、

識訳4巻本では「功德天品」にのみ1呪の陀羅尼を見るだけであったが、義浄訳10巻本では、35呪へと増加するのである。この陀羅尼の展開を図示すれば、図1(稿末)の如くなる。

ここで注目すべきことは、『合部金光明經』の中にある「功德天品」には、2呪の陀羅尼が並存していることである。先の陀羅尼をA呪、後の陀羅尼をB呪とすれば、A呪は識訳4巻本「功德天品」にある陀羅尼1呪に適合し、B呪は義浄訳10巻本「大吉祥天女增長財物品」の陀羅尼1呪にほぼ適合する³²⁾。もちろん、図の如く当初「功德天品」にもあったA呪は、経典の発展の中でB呪へと変換され、義浄訳ではA呪はなくなってしまっている。そういう意味では、A・B両呪のある『合部金光明經』の「功德天品」は、その過渡期にできたものといえる³³⁾。

ところで、このA・Bの両呪は内容の上で些か違った意味をもって用いられていることが分かる。前者A呪は、所謂聞持陀羅尼(dhāraṇadhāraṇi・つまり聞いたことをよく持つという憶持の記憶力としての陀羅尼)の色彩が強いのであるが、後者B呪になると、A呪のような受持し懺悔礼拝することによって除災招福するという意味は薄れ、むしろ陀羅尼を誦読することによって一切が成就するという「定成就句、真実之句」としての密教の真言陀羅尼の色彩をおびてくるのである。このことは密教(純密)の成立と大きく関係していると考えられる³⁴⁾。

本来、本経はチベットでは秘密部に属し、中国・日本では方等部の経典として取りあつかわれるという非常に不明瞭な位置にあった。しかし、思想的には大乘的教理を多分に含んだ純粹大乘経典である反面、内容的には密教的(雑密)色彩の濃い経典であることは確かであろう。もちろん学者によって本経の位置づけには異論があろうが、私としては、思想的には大乘的教理を基底とし

つ、儀礼の内容として雑密的側面を導入し発展してきた経典と考えたい³⁵⁾。

事実、金光明経（特に義浄訳10巻本）の成立のすぐ後には、『大日経』『蘇悉地経』『金剛頂経』といった所謂純密経典の類が成立するのであるが、そういった仏教学史のうえでの密教成立といった問題に対して、本経の内容とそこに説かれる陀羅尼の分析研究が、その解明に重要な意味を持つものと思われる³⁶⁾。

もちろん本経に説かれた陀羅尼について、それらがどのような経典の影響を受けて採り入れられ、またどのように展開して行くのかという詳細な考察が今後の課題になるが、先に述べた「功德天品」に説かれたA呪からB呪への陀羅尼の展開が、雑密から純密成立への変遷への一例を示すものとして、特にここではとりあげた訳である³⁷⁾。

3. 中国における研究小史

さて、前節では本経の漢語翻訳と経典内容の展開について考えた訳であるが、次に本経の翻訳以後の中国における研究の展開について考察してみたいと思う。

真諦（Paramārtha）は、前節で述べた如く承聖元年（552）に建康に來り、『金光明帝王経』7巻22品を訳出したが、同時にその註釈書も撰述している。これは『金光明経疏（文句）』（6巻又7巻）とよばれるものであるが³⁸⁾、日本にも奈良朝には伝わっており、当時の金光明経研究の資料になっていたと思われる³⁹⁾。もちろん、これが中国におけるはじめての註釈書であり、4巻本・7巻本の理解には、極めて重要なものとして流布していたように思われる。

次に隋代に至って、一時は衰退した仏教も急速に復興され、いよいよ国家仏教の様相を呈しはじめた訳であるが、大乘経典としてインド・西域で重要視された本経も国家仏教的政策の中で、次第

に普及し重要視され、国家的事業の中で本経の新たな翻訳編纂が行われたのであった。そこで完成したのが、前節でも述べた『合部金光明経』8巻である。これは、隋の官寺で当時の仏教界の最も中心であった長安の大興善寺において、闍那崛多や彦琮などの学僧によって翻訳され、開皇17年（597）實貴などによって編纂されたものである。もちろん、この時期の前後にも本経の研究が盛んに行われ、幾人かの学僧によって註釈書が撰述されることとなる。

淨影寺慧遠（523～592）は、地論宗南道派の学僧として有名であるが、『開元釋教録』にも見る如く、最も晩年に大興善寺における闍那崛多の本経の翻訳編纂事業に参加している⁴⁰⁾。慧遠には、『金光明経義疏』（1巻）があったが、これは『合部金光明経』の完成以前に撰述されたものと思われる⁴¹⁾。

吉蔵（549～623）は、真諦三蔵に相見し吉蔵の名を貰ったとされ、後に嘉祥大師と呼ばれた三論の大学匠である。この吉蔵には、『金光明経疏』（1巻・大正39巻）があり、これは三論の立場から本経の思想をどのように理解しているのかを知り得る重要な資料といえる。日本にも奈良朝には伝わっており、特に元興寺三論宗の学僧でもあった願暁の『金光明最勝王経玄樞』には、この吉蔵の『金光明経疏』からの引用文が多数見られる⁴²⁾。吉蔵がいつ頃この疏を製したかは不明であるが、本文の内容から察して、吉蔵は識訳4巻本と真諦訳7巻本の両本だけしか参照していないので、恐らくは8巻本の成立（597年）以前と思われる⁴³⁾。

一方、天台宗でも古来本経は重要視され、中国天台史の展開にも本経の多くの研究が見られる。特に天台においては、宗祖智顛の本経註釈にも見られる如く、曇無讖訳『金光明経』の研究が専ら中心であり、義浄訳『金光明最勝王経』の方についてはあまり言及されない。また天台では、本経

金光明經の教学史的展開について

を教理的に研究するだけでなく、本經に基づいた修法としての金光明懺法が重視され、古来実践されてきた点が特徴といえる。この天台大師智顛が講説し、それを弟子の灌頂が筆録したとされるものに、『金光明經玄義』（2巻・大正39巻）『金光明經文句』（6巻・大正39巻）『金光明經疏』（3巻）『金光明經懺法』（1巻）などがある⁴⁴。就中、『金光明經玄義』は重要であり、この解釈をめぐって後に宋代には山家山外論争がおこるのである。尚、これらが撰述された年代については、開皇17年（597）に智顛が示寂した後に、弟子灌頂がまとめたものと考えられるので、597年直後ぐらいに撰述されたものと思われる⁴⁵。

また、志徳撰述とされる『金光明經疏』（8巻）があったとされるが、この志徳の經疏からの引用が常騰の『註金光明最勝王經』にも見られるから、奈良朝には日本にも伝わり本經研究の参考として当時流布していたことがわかる⁴⁶。尚、この志徳については『開元釋教録』に

沙門闍那崛多。隋云志徳。北賢豆囉國人也⁴⁷。とある如く、前節でも述べた闍那崛多の中国での名が志徳であり、本經を翻訳研究する上でその註釈書として、闍那崛多によりこの『金光明經疏』が著された可能性がある。

さて、唐代に至り仏教の最盛期を迎えることとなり、本經の研究も一層盛んになった。就中、長安3年（703）には、義浄が最新の『金光明最勝王經』（10巻31品）を訳出し、本經の数百年に渡る伝来翻訳にも終止符が打たれることとなるが、これを境として前後いくつかの註釈書が書かれた。

唐代の義浄訳が出るまでの註釈書としては、道宣撰『金光明經疏』（10巻）玄暢撰『金光明經疏』（3巻）などがあげられると思われるが、いずれも散失して現存していない。道宣（597～667）は、（南山律宗の祖として有名であるが）招かれて玄

奘の訳經にも列したほどであり、『四分律行事鈔』などの律部疏だけでなく、『続高僧伝』『大唐内典録』など多くの經疏を著述したのであるが、この道宣にも本經の註釈があったようである⁴⁸。また、玄暢については全く不明であるが、その經疏名から義浄訳以前であったと考えられる⁴⁹。

次に、義浄訳以後の註釈としては、勝莊撰『金光明最勝王經疏』（8巻）慧沼撰『金光明最勝王經疏』（10巻）利貞撰『最勝王經纂決』（3巻）有則撰『金光明經疏』（10巻）・『最勝王經正辨』（1巻）などがあげられる。特に、前節で述べた如く、勝莊は長安3年（703）の義浄の本經翻訳に直接参加した学僧である。この勝莊は、新羅の出身であり、当時の玄奘所伝の唯識を学び、後に円測に師事したとも言われ、大薦福寺や崇義寺に住した。また、慧沼や利貞も本經翻訳には直接参加しなかったが、その後の義浄の訳經事業に加わった学僧であった。慧沼は、いうまでもなく淄州大師と称され、法相第二祖とされる大学匠である。利貞や有則については不明であるが、利貞は慧沼と同時期の学僧であり、有則はその少し後の人物であると思われる⁵⁰。これらの学僧が撰述した本經の註釈書は、特に南都仏教での本經研究に大きく影響し、勝莊と慧沼の本經疏は当時の本經註釈の最も龜鑑とされるものであった。

さて、仏教の最盛期を迎えた唐代もやがて終わり、五代に至っては度重なる戦乱や後周世宗の廢仏政策などにより、仏教は大きく衰退する傾向にあった。しかしやがて宋代に至って再び国家統制のもとで、仏教は徐々に回復する兆しを見せたのである。この宋代仏教では特に禅宗の隆盛が見られるが、就中本經の研究は、天台宗の展開の中で最も盛んに行われた。

その過渡期に当たる本經研究としては、靈光寺皓端（890～961）の『金光明經隨文釋』（10巻）があげられる。この皓端は、初め南山律を学んだ

が後に天台も学び、呉越中献王銭より紫衣を賜ったとされ、後に天台山外派の晤恩も師事したといわれる学僧である⁵¹⁾。

ところで、趙宋天台では「山家山外論争」という中国仏教史上稀にみる教学的論争がくり広げられたのであるが、この論争展開の中で、本經に関する註釈書も多く著された。そもそも、この山家山外論争の発端は、当時『金光明經玄義』(智顛説・灌頂撰)には広略二本があり、そのうち広本には観心釈があり、略本には観心釈がなかったのであるが、この観心釈の有無をめぐる論争が始まったのである。その広本(観心釈あり)を正説とする山家派には、義通、澄或、知禮、遵式などの学僧があげられ、また略本(観心釈なし)を正説とする山外派には、晤恩、洪敏、源清、智圓、慶昭などの学僧があげられる。これらの山家山外論争としては、特に咸平3年(1000)から景德3年(1006)の前後7年間に5回にわたる激しい論争のやりとりがあり、以後も半世紀以上にわたって展開されるのであった⁵²⁾。

山家派の義通(927~988)は、高麗国の出身で、華嚴・起信論等を修学した後、天台山に遊学し義寂から天台の法門を受けたとされる学僧であり、その著に『金光明玄贊釋』、『金光明文句備急鈔』などがある⁵³⁾。また義通と同門である澄或にも『光明玄金鼓記』があった⁵⁴⁾。

一方山外派の晤恩(912~986)は、初め南山律を学び、靈光寺皓端より諸經論を学んだが、開運年中(944~946)以後は志因の門に入り天台を修学した。彼の代表的著作には『金光明玄義發揮記』がある⁵⁵⁾。またその弟子に洪敏、源清などがいるが、洪敏は晤恩の学説をうけて、『光明玄義記』を著している⁵⁶⁾。源清も大いに晤恩の影響を受け、その門下に慶昭、智圓が輩出することとなる。この慶昭と智圓は、咸平3年(1000)以後の7年間の山家山外論争では、共に与して山家派知禮を論

駁した山外派を代表する学僧である。尚、この智圓には、『光明玄義表微記』(1巻)、『光明文句索隱記』(4巻)の著述がある⁵⁷⁾。

さて、義通の門弟としては知禮と遵式とがあげられるが、この両者は山家派の正統として代表される学僧であり、特に知禮は中国天台の教観二面にわたりその復興の偉業を成し遂げた学僧として重要である。

知禮(960~1028)は、初め太平興国寺洪選に師事し主に律部を学んだのであったが、20歳の時義通の門に入り天台を修学したといわれる。咸平2年(999)年以後は、延慶寺に住し専ら講説と修懺を行っている。特に講説では、法華玄義、摩訶止観など多くの註疏について行っているが、中でも『金光明經玄疏(玄義)』の講説は最も回数が多く、10遍に及んでいる。また、修懺としても金光明懺法を20遍(総計200日間)修するなど、天台の解行双修の正統的立場を継承し実践していた⁵⁸⁾。知禮は晤恩の『金光明玄義發揮記』が著されるとすぐに『釈難扶宗記』を著しこれを反駁し、山家山外の論争の火蓋が切られたのであった。知禮には著述も多く、現存するものには『金光明玄義拾遺記』(6巻)、『金光明經文句記』(6巻)、『金光明最勝懺儀』(1巻)、『光明玄当体章問答偈』(1巻)がある⁵⁹⁾。この『金光明玄義拾遺記』は、『金光明玄義』の註釈書であり、特に智圓の『光明玄義表微記』で否定された観心釈を有する広本を是認する為に、1023年に著されたものである。『金光明經文句記』は『金光明經文句』の註釈であるが、同じく智圓の『光明文句索隱記』を論破するために、知禮68歳(1027年)に著したものである。この他、知禮の著述は多く、『金光明經十義書』(5巻)、『金光明經釋難扶宗記』(1巻)、『光明玄續遺記』(3巻)、『金光明文句記科』(2巻)、『金光明玄義科』(1巻)などがある⁶⁰⁾。

遵式(963~1032)は、初め天台の東掖山で義

金光明經の教学史的展開について

全に就いて出家し、具足戒を受けた後、乾徳2年(983)四明の地に行き義通に師事し山家派の正統として、知禮とともに天台の復興に尽くした。知禮と同様に解行双修の学僧であり、著述も誠に多く本經に関しては、『金光明玄義文句科』(1巻)『金光明經懺法補助儀』(1巻)、『金光明護国儀』(1巻)、『金光明經王章』などがある⁶¹⁾。

このように、山家山外派の展開において多くの本經に関する研究が見られるが、これは主に宗祖智顛が説いたとされる『金光明經玄義』と『金光明經文句』の解釈研究に基づいていることはいうまでもない。この他にも山家派には、尚賢(1028頃)の『光明玄闡幽志』、継忠(1011~1082)の『金光明經科』(1巻)、從義(1042~1091)の『金光明經玄義順正記』(3巻)、『金光明經文句新記』(7巻)、如湛(1100~1149)の『光明玄義護国記』(4巻)、宗暎(1190年頃)の『金光明經照解』(2巻)などの著述がある⁶²⁾。

さて、この他の著述としては『義天録』に靈鑑述『金光明王解』(1巻)、智沼述『金光明經科文』(4巻)・『金光明經弁正鈔』(7巻)、靈順述『金光明經述記』(3巻)、驚韶述『金光明經疏』(4巻)などがあげられているが、これらは恐らく唐末から宋代にかけて撰述されたものと思われる⁶³⁾。

宋代末(13世紀)以降は、ほとんど本經に関する研究は見られず、明代に明得(1531~1588)の『金光明經文句科』(1巻)、『金光明經玄義科』(1巻)、また受汰(17世紀頃)の『金光明科註』(4巻)などの著述をみるのみである。尚、明得、受汰は天台の学僧であり、特に明得は『金光明玄義』と知禮の『拾遺記』、『金光明文句』と知禮の『文句記』をそれぞれ疏記合刻し、會本とするなど、天台山家の教学研究に努めたのであった⁶⁴⁾。

4. 朝鮮における研究小史

一方、朝鮮仏教においても本經に関する研究が

行われている。本經がいつ頃朝鮮に伝わったかは定かでないが、識訳4巻本が5世紀中頃に中国で翻訳されてより、極めて早い時期に伝わったものと思われる。特に、新羅の眞興王12年(551)には、高句麗の僧惠亮が新羅に亡命して新羅の国統となり、初めて、百座講会と八關齋会を実施したとされる。この百座講会では本經の転読なども行われるなど、本經は早くから護国經典の一つとして高句麗、新羅では重要視されていたことが分かる⁶⁵⁾。

やがて統一新羅の時代になって、本經は単に護国の儀礼で用いられるだけでなく、本經の教学面での研究が盛んに行われるようになった。それは言うまでもなく、唐代仏教(教学研究を中心とする傾向)の影響を大きく受けたということである。当時、新羅と唐との交流は盛んであり、義湘、円測、勝莊などの学僧が入唐し、唐代仏教の花形とも言うべき華嚴や法相の教学を学び多くの註釈書を著し、後代に大きな影響を与えたことは周知のとおりである。この時期に本經の研究を行い、註釈書を著した学僧としては、元暎、憬興、遁倫、勝莊、太賢などがあげられる。彼らは、言うまでもなく性相学の大家として有名であるが、彼らの本經の註釈書は、特に我が国奈良朝南都仏教の本經研究に大きな影響を与えていることは特筆すべきであろう。

元暎(617~686)は、29歳の時新羅の皇竜寺において出家し各地に遊学し、眞徳王4年(650)に義湘と共に入唐を試みたが果さず、新羅仏教の教学復興に努め、『華嚴經疏』、『金剛三昧經論』など多くの著述を残している。この元暎には『金光明經疏』(8巻)があったが、これは識訳4巻本の註釈書であると思われる⁶⁶⁾。

憬興は、18歳で出家し三蔵に通達した学僧として名声があったらしく、文武王は681年に憬興を国師とすべきことを遺言し、また神文王の時には、

国老に任ぜられたとされる学僧である。この憬興には多くの著述があったとされるが、本経については、『金光明経略意』（1巻）、『金光明経述贊』（7巻）、『金光明最勝王経略贊』（5巻）がある。憬興の生没年代については不明であるが、7世紀後半から8世紀前半の人と思われる^{67）}。

遁倫（道倫）は、慈恩大師基の弟子とされ、玄奘門下の法弟である慧沼よりも先輩であり、700年前後に唐で活躍したとされる新羅出身の学僧である^{68）}。彼には、玄奘訳の『瑜伽師地論』の註釈である『瑜伽論記』（48巻・大正第42巻）が現存するだけであり、生没年代については不明である。この遁倫には、『金光明経略記』（1巻）があったとされるが、恐らくこれは義浄の10巻本が翻訳される（703年）以前に著されたものと思われる^{69）}。（勝荘については、前章で述べたのでここでは省略するが、彼もまたこの頃の新羅出身の学僧であった。）

太賢も三蔵に通じ、多くの註釈を著した学僧である。慶州南山の茸長寺に早くより隠棲したとも言われ、景德王12年（753）の夏には、内殿で『金光明経』を講じて洄れ井戸をよみがえらせたとも言われている^{70）}。生没年代については不明であるが、8世紀頃の人といわれ、『金光明経述記』（4巻）、『金光明経料簡』（1巻）がある^{71）}。

5. 日本における研究小史

本経がいつ頃日本に渡来したかは明確には分らないが、四天王が護国のために祀られるということが極めて早くに見られるので、恐らくは推古朝には伝来していたと思われる。しかし、『日本書紀』第29巻（天武5年11月20日の条）に

甲申、遣使於四方國、得金光明經仁王經^{72）}。

とある如く、この天武5年（676年）以後、本経は度々史書にも登場し、護国經典として重視され、しばしば国家安泰、五穀豊穡を願う護国儀礼（法

会）において転読されたり、誦経されることとなった^{73）}。

特に聖武天皇の御代になり、中国より義浄の新訳『金光明最勝王経』が伝来すると、神亀5年（728）12月には、この『最勝王経』640巻が10巻ずつ全国に配布され、国家安泰が祈られるなど^{74）}、本経が律令体制の中で急速に普及し最も珍重されるようになるのである。しかも、『続日本記』巻第十一に

自今以後不論道俗。所學度人。唯取闇誦法華經一部。或最勝王経一部。兼解礼佛淨行三年以上者。令得度者^{75）}。

とある如く、天平6年（734）11月には、勅令により僧となるためには、本経が法華経の暗誦が必須となり、当時の僧団においては本経は盛んに学ばれたと思われる。

さらに天平9年（737）10月には、大安寺の道慈が宮中大極殿において、この『最勝王経』を講説し^{76）}、次いで天平13年（741）3月には所謂国分寺建立の詔が出され、諸国には七重の塔が造られ、その塔の中には『最勝王経』1部10巻が書写され安置されたのであった。さらに各国の僧寺は金光明四天王護国之寺と、尼寺は法華滅罪之寺と命名され、また別に天皇自らも金字で『金光明最勝王経』を書写し、各国分寺の塔内に奉置している^{77）}。ところでこれらの寺号からも分かるように、『法華経』は護国三部の經典とされながらも、ここで尼僧寺の寺号にこの經典名が用いられたように、特に女性側（尼僧）の救済において『法華経』は重視されたと言えよう^{78）}。これに対して本経は僧侶のみならず、天皇自ら書写した如く、むしろ国家全体の安泰を願うという意味において最も重く位置づけられていたのであった。

このように、本経は奈良朝律令体制の中での国家の護持的機能を果す（鎮護国家的）宗教として仏教が展開する上で、最重要の經典とみなされた

のであるが、大陸の教学中心の（思弁的）仏教の影響を受けて、単に本経を書写、転読するだけではなく、本経を教学の上で位置づけ、研究する動きがあらわれ、多くの学僧によってその註釈書が著されることとなった。就中、この時代の註釈者としては善珠、明一、行信、常騰、護命、願暁、平備などの学僧があげらよう。

善珠（724～797）は、幼き頃から興福寺に入り、玄昉について唯識・因明を学んでいるが、所謂北寺伝の正統派として代表される学僧である。唯識・因明関係の著述も多いが、本経に関しては『最勝王経遊心決』（3巻）、『最勝題記』（1巻）があったとされる⁷⁹。

明一（728～798）は、和仁氏の出身とされる東大寺の学僧である。当時東大寺は大和国金光明寺と呼ばれ、全国にある国分寺の総轄的位置にあった訳であるが、天平の頃にはここに写経所もあり、『最勝王経』の写経もここでなされ、金光明経研究の中心となっていたのである⁸⁰。明一は、そういった東大寺における本経研究を代表する学僧であり、『金光明最勝王経註釋』（10巻）を撰述している⁸¹。この註釋は、その巻第一の題記横に

多用沼疏少取余説。

とあり、また序本第一に

夫以贊釋此經諸家良多。唯有大薦福寺勝莊法師。西明寺惠沼法師。新羅國憬興法師者。並是人中龍象城内英賢。遐稱場緇索知識。俱起弘法。咸各制義疏。可謂重明佛日朗世間之幽闇。再扇慈風開群品之耳目⁸²。

とある如く、主に勝莊、慧沼、憬興の本経註釈を引用し、中でも慧沼の本経疏を底本として編集されている。

行信（8世紀頃）は、行基の弟子とも言われ元興寺・法隆寺に住した。法隆寺東院伽藍の復興に尽くし、行信僧都発願経が法隆寺に伝存する⁸³。尚、下野遠流になった薬師寺の僧行信とは別人で

ある⁸⁴。この法隆寺行信には、『最勝王経音義』（1巻）があった⁸⁵。

常騰（740～815）は、もと大安寺の学僧であったが、慈訓の弟子である永巖について唯識を興福寺に学び、後に西大寺に住した学僧である。唯識に関する著述も多いが、本経研究においては『註金光明最勝王経』（10巻）を著している⁸⁶。この註釈は主に慧沼の本経疏を底本としているが、他に勝莊、利貞、元暁、憬興、志徳、真諦、安国、薦福といった大陸の学僧の註釈書からの引用が多く見られ、現存しないこれらの学僧の註釈内容を知るうえで重要な資料でもある⁸⁷。また同時に、これら多くの註釈を駆使して本経註を撰述している常騰の学識の高さが窺える。

護命（750～830）は、元興寺の勝虞より唯識を学び、南寺伝の正統派として天長勅撰には『大乘法相研神章』（5巻）を著した学僧である。この護命には、『最勝王経解節記』（6巻）があった⁸⁸。

願暁（835～871）は、勤操の弟子であり、元興寺で薬宝・勤操について三論を学んだとされる三論宗の学僧である。この願暁には『金光明最勝王経玄樞』（10巻）がある⁸⁹。尚、この註釈には、従四以下文章博士兼播磨権守菅原朝臣が序文を製しているが、そこには

元興寺有願暁法師。夙登真地深入慧門。照果葉於四諦。轉圓對於一乘。恨先達之発念無成。漸後学之背本従末。注集三論宗義。疏以真諦三蔵為根本。以闍那法師為枝葉⁹⁰。

とあり、また別には

一依三乘解。莊法師等。二依一乘釋。嘉祥等也。…（中略）…若依三乘。如沼疏辨。如是皆入一乘門。應總攝之。今依一乘。夫大教之興。因縁無量⁹¹。

とある如く、願暁のこの註釈書は、勝莊、慧沼の三乗を真実とする立場からの解釈ではなく、三論の一乗を真実とする立場からの解釈《真諦や嘉祥

(吉蔵)の註釈)に基づいたものであることが分かる。しかも、三乗の立場も結局は一乗に包摂されていくべきものであるという見解から、三乗の立場にある勝荘、慧沼などの註釈を補助的に引用しているのが特徴とも言えよう。またこの願暁の註釈書には、嘉祥、真諦、勝荘、慧沼といった学僧のほか、元暁、憬興などの註釈書からの引用が見られる。

平備は、元興寺の学僧であり、恐らく9世紀から10世紀頃の人と思われる⁹²⁾。性相学に精通し、著述も多いとされるが、本経については『最勝王経羽足』(1巻)、『最勝王経調度』(4巻)がある⁹³⁾。尚、『最勝王経羽足』には、特に慧沼の本経疏からの引用が多く見られるが、その他には真諦、憬興、寶師、備師といった学僧の註釈の引用も見られる⁹⁴⁾。

以上のように、奈良朝・平安初期にかけて我国でも、多くの学僧が本経の註釈書を著しているが、これらは大陸の註釈をそのまま引用・合糅したものである。その主なものとしては、真諦、吉蔵、慧沼、勝荘、元暁、憬興といった学僧の註釈が挙げられるが、これらは、当時我国において本経を研究するうえで、最も流布し重要視されていたことが分かる。

平安期に入り、新たに空海が真言宗、最澄が天台宗を唐より招来することとなるが、これら両宗においても、南都と同様に鎮護国家の立場は継承されることとなる。それ故、護国經典の第一として、当時重要視された本経を無視することはできず、その研究も不可欠であった訳でもあり、彼らも本経の註釈書を著している。

空海(774~835)は、『金光明最勝王経解題』(1巻)、『最勝王経伽陀』(1巻)、『最勝王経略釋』(1巻)などを著しているが⁹⁵⁾、これらは真言密教の立場からの本経解釈として著述されたものである⁹⁶⁾。

また最澄(767~822)は、『金光明開發』(1巻)、『金光明経註釋』(5巻)、『金光明経雜義』(1巻)、『金光明文句』(3巻)、『金光明経科簡』(1巻)、『金光明長講會式』(1巻)など数多く著しているが、これらの註釈書は、恐らく天台大師智顛の著した『金光明経玄義』、『金光明経文句』などを底本としたものと考えられる⁹⁷⁾。

さらに圓珍(814~891)は、仁寿3年(853)から6年間唐に渡り天台、密教などを学び、後に第5代天台座主となり、寺門派の祖となった学僧である。圓珍には『金光明経開題』(2巻)、『最勝王経疏』(5巻)、『最勝王経文句』(10巻)などの註釈がある⁹⁸⁾。ところで、中国天台の学僧や先の実澄にしても、通常天台における本経研究は、専ら識訳『金光明経』に関しての註釈を中心としているが、圓珍に於いては主に義浄訳『金光明最勝王経』に関しての註釈を著している点、その特徴と言えよう。

さて平安以後の本経の註釈書などについて簡潔に列挙すれば以下の如くになるとと思われる。

源信(942~1017)は恵心僧都とも呼ばれ、『往生要集』を著した天台宗の僧であるが、『最勝王経開題』(1巻)を著している⁹⁹⁾。

證真(1180年頃)は、源空に円頓戒を受けたともいわれる比叡山宝地坊に住した学僧である。この證真には『金光明玄略抄』(1巻)がある¹⁰⁰⁾。

貞慶(1155~1213)は、解脱上人ともよばれ、鎌倉初期の法相宗(興福寺)の学僧であり著述も多いが、『最勝問答鈔』(1巻)を編集している¹⁰¹⁾。これは、義浄訳『金光明最勝王経』の内容における問題点をあげ、それを問答論議の形式で解明したものである。それ故、これは貞慶一人の著作ではなく、問者として、円玄、晴弁など35人の学僧の名があがっており、これらの問答を貞慶が編集したものである¹⁰²⁾。

良算(1202年頃)は、貞慶の弟子であり、『唯

金光明經の教学史的展開について

識論同学鈔』(68巻)を集録した学僧であるが、『金光明經品釋』(1巻)を著している¹⁰³⁾。

聖禅(13世紀頃)は、藤原正尊の子であり東大寺で華嚴、俱舎などを学び、後に仁和寺において密教を修した学僧である。聖禅は『最勝王經略釋』(1巻)を著しているが、これは勝莊の『最勝王經疏』(8巻)を依拠として註釈したものと言われている¹⁰⁴⁾。

頼瑜(1226~1304)は、高野山大伝法院の学頭にもなったが、後に根来寺に住した新義真言宗の学僧である。この頼瑜には、『最勝王經開題愚艸』(1巻)があったとされる¹⁰⁵⁾。

實乗(1260年頃)は、圓照律師につき出家得度し、京都増福寺に住した律僧である。文応元年(1260年)入宋したと言われるが、『金光明經玄義拾遺記會本』(3巻)を撰述している¹⁰⁶⁾。

信空(1231~1316)は、興正菩薩觀尊の弟子であり、西大寺の律僧である。信空には『金光明經聽聞抄』(1巻)がある¹⁰⁷⁾。

宥快(1345~1416)は、高野山實性院に住した真言宗の学僧である。悉曇学を唱え、室町期の高野真言宗における教相の大成者であり著述も頻る多い。この宥快には、『最勝王經開題鈔』(1冊)がある¹⁰⁸⁾。

亮潤(1668~1750)は、天台宗正覚院の学僧であり、享保年間(1716~1735)に『金光明經玄義拾遺記探蹟』(2巻)を著している。尚これは、知禮の『金光明經玄義拾遺記』の註釈書である¹⁰⁹⁾。

泰巖(1711~1763)は、摂津小曾根郷にある(本願寺派)常光寺に住した真宗の学僧であり、『金光明經考』(1巻)を著している¹¹⁰⁾。

守篤本純(1701~1769)は、比叡山安楽院の靈空光謙に師事し、解行双絶と称された天台宗の学僧である。この守篤には、『金光明經玄義記聞書』(4巻)がある¹¹¹⁾。

慧澄癡空(1780~1862)は、江戸浄名院(天台

宗)の学僧である。後に比叡山に登り安楽院にて多年修行したと言われ、『金光明經玄義拾遺記聞書』(1巻)を著している¹¹²⁾。

大安(1806~1883)には、『金光明最勝王經王法正論品聽記』(1巻)がある¹¹³⁾。

このように我国においては、多くの学僧によって本教の研究がなされ、その註釈書が数多く著されているが、就中、奈良朝南都仏教における本教の研究は目覚ましく、大陸の影響を大いに受けて、本教の教学的な位置づけがなされたことは重要といえる。

6. おわりに

以上述べたように、金光明經は当初曇無讖が漢訳を行って以来、その内容においても幾度かの発展を遂げ、広く大乘諸教理を包摂しながら、そのボリュームを拡大していったのである。特に、本經における梵本の地域的相違、三身説の導入、懺悔から滅業への思想の拡大、陀羅尼の導入など、その発展段階においてこれらの問題点・特徴が見られたことは、上述した如くである。さらに、このような經典内容の発展を見る一方で、本經に関する研究も大いになされたことも重要であろう。中国では、多くの学僧がその註釈を著す一方で、天台の山家山外論争における本經解釈の問題、また我が国においては、護国思想と相俟って南都仏教において各宗派の立場からも多くの解釈・研究がなされるなど、教学史上本經は重要な意味を持つことは言うまでもない。

本稿では、専らその教学史的展開に焦点をあて、その特性と概観を試みに考察してみたわけである。勿論、教学史のみならず、その教学的内容として、本經の解釈学的展開また各宗派における解釈の相違など、多くの問題が明確にされるべきであろうが、それらについては今後の研究を待つこととしたい。

註

1) 『梵語仏典の諸文献』(山田龍城著)のP102~103参照。他の写本には、『Suvarṇaprabhāsa-sūtra』等とあり、梵名も幾種類がある。言うまでもなく、曇無讖訳『金光明経』はSuvarṇaprabhāsa-sūtraであり、義浄訳『金光明最勝王経』はSuvarṇaprabhāsa-sūtraという梵名であったと考えられる。またネパール九法宝典とは、Latitavistra(普曜経) Aṣṭasāha-srikāprajñāpāramitā(八千頌般若経) Daśa-bhūmiśvara(十地経) Gaṇḍavyūha(華嚴経) Lankāvatāra(入楞伽経) Suvarṇaprabhāsa(金光明経) Samādhirāja(月燈三昧経) Sad-dharmapuṇḍarīka(法華経) Tathāgataḥyaka(= Guhyasamāja)(秘密集会)等である。

2) 梵文刊行については、最初ネパール写本により、インドのチャンドラ・ダース、チャンドラ・シャーストリーが1898年に(Śarat Candra Dās & Candra Śāstri; Suvarṇaprabhāsa-sūtra, Buddhist Text Society of India, Calcutta, 1898)を出版したが未完に終わった。次にトマス(F・W・Thomas)によって梵本断片が紹介された。(Hoernle; Manuscript Remains of Buddhist literature found in Eastern Turkestan, vol.1, Oxford 1919, pp108~116)

原典の完本は、昭和6年(1931年)泉芳環氏が『梵本金光明経』(The Suvarṇaprabhāsa Sūtra, A Mahāyāna Text called "The Golden Splendour The Eastern Buddhist Society. Kyoto, 1931)を出版した。これは、ロンドンの王立アジア協会、ケンブリッジ大学、パリのビブリオテーク=ナショナル、京大、東大の所属写本に漢訳、蔵訳等を参照してできた校訂本である。また、これに基づいた和訳が、昭和8年『梵漢対照新訳金光明経』(泉芳環)として刊行された。

また、1937年にドイツのマールブルヒ大学のノーベル(Johannes Nobel)が、"Suvarṇaprabhāsa-sūtra" (Das Goldglanz-sūtra. Ein Sanskrittext des Mahāyāna-Buddhismus. Nach den Handschriften und mit Hilfe der tibetischen und chinesischen Übertragungen, hrsg. von Johannes Nobel, Leipzig 1937)を出版した。尚、これはケンブリッジ大学所

蔵3写本、レニングラードのアカデミー所蔵写本、王立アジア協会写本、ビブリオテーク=ナショナルレ所蔵2写本等の7写本に基づいたものである。さらに1967年に、バクチ刊本(Buddhist Sanskrit Text, No.8)がインドで出版された。尚、このノーベル刊本の英訳(The sutra of Golden Light, Being a Translation of the Suvarṇaprabhāsa-sūtra, by R.E. Emmerick, London 1970)がある。

3) チベット語訳については、『西藏大藏経総目録』(東北大学蔵)にある如く、デルゲ版555番(北京版174番、ナルタン版489番)は、義浄の漢訳10巻本のチベット語の重訳であり、9世紀中頃に法成(Chos-grub)が訳したものである。

デルゲ版556番(北京版175版、ナルタン版490版)は、レパチエン(Ral-pa-chen)王の頃(AD815~836)に、インド人のジナミトラ(Jinamitra)とシーレンドラボーディ(Śīlendra bodhi)チベット人のエセイデ(Ye-śes-sde)の三者によって梵語原典からチベット語訳されたものである。

デルゲ版557番(北京版176版、ナルタン版762版)は、現存梵本に一致する。訳者の名前は欠けているが、伝承によってジュニャーナクマラ(Jñānakumāra)等によって訳されたものとされる。(『金光明経解題』岩本裕著、参照)尚、(NOS. 556, 557)については、ノーベルのチベット訳("Suvarṇaprabhāsa-sūtra." Die tibetischen Übersetzungen, mit einem Wörter-buch, Leiden, 1944)と梵蔵独対照の詳細な語彙索引("Suvarṇaprabhāsa-sūtra," Zweiter Band. Wörter-buch Tibetisch-Deutsch-Sanskrit, Leiden 1950)の出版によって明らかにされており、(NOS. 555)の義浄10巻訳より重訳されたチベット語訳とその義浄訳『金光明最勝王経』のドイツ語訳が、ノーベルによって("Suvarṇaprabhāsa-sūtra" I-Tsing's Chinesische Version und ihre Tibetische Übersetzung Brill, 1958)1958年に出版された。

ソグド語訳については、P, Pelliot: Journal Asiatique, serie . tome . 1914 p147にある。

ウイグル語訳については、F.W.K. Müller; Uigurica, Abhandlungen der Berliner Akademie der Wissenschaften, 1908, S.10~35にある。

金光明經の教学史的展開について

コータン語訳については、Pelliot, P: Un fragment du Suvarṇaprabhāsa-sūtra en Iranien Oriental, Etudes linguistiques sur les documents de la Mission Pelliot Fasc.4, 1913

Leuman, E: Buddhistische Literatur, nordarisch und deutsch. I. Teil: Nebenstücke, Leipzig. 1920. s.57f8

Sten Konow: Zwölf Blätter einer Handschrift des Suvarṇaprabhāsa-sūtra in Khotan-sakish (Abhandlungen der preussischen Akademie der Wissenschaften) Berlin, 1935 等にある。カルムク語(西部蒙古語)訳は、チベット語訳よりの訳であり、

Erich Haenisch: Alten Gerel, die westmongolische Fassung des Goldlanzūtra, nach eine Handschrift der kgl.

Bibliothek zu Kopenhagen, Teil Text, Leipzig. 1929.

P.Aalto: Notes on the Altan Gerel, studia orientalia , 6, Helsinki 1950. に詳しい。またモンゴル語にも訳された事も知られている。

(Rajapatirana, T: Index to the Titles of Work in the Mongolian Kanjur and Tanjur, Part 1: Sanskrit Titles, Canberra 1969. p41.参照)

このようにアジア広域に、本経が弘通し研究されていた。尚、本経弘通に関しては、金岡秀友氏『金光明經の研究』「第4章 アジア各地における『金光明經』の弘通」(昭和55年2月、大東出版)に詳しい論考があるので参照。また、本経の翻訳、本経に関する近現代の論考については、『薬師寺最勝会の形成過程の研究』(大阪教育大学) p152以下に詳しい。

- 4) 『高僧傳』卷第二「曇無讖第七」(大正50巻、335頁c段)には、「曇無讖或云曇摩讖或曇無讖。蓋取梵音不同也。其本中天竺人。……」とあり、同336頁b段に「以偽玄始三年初就翻譯。至玄始十年十月二十三日三秩方竟。即宋武永初二年也。」また、『開元釋教錄』卷第四「沙門曇無讖」(大正55巻、520頁c段)にも、「讖以玄始三年甲寅創首翻譯。」とある。

もちろん、どのような思想背景のもとに、この經典が成立したかは、今後の梵本原典の研究により、解明されるであろうし、それによってより確実な成立年代、地域が明らかにされると思う。

- 5) 『日本大藏經方等部章疏1』の457頁上段末より引用。

- 6) 前掲同書457頁下段に「初即北涼蒙遜之世有三藏法師。梵云曇無讖。晉云法豊在姑臧縣中翻為四卷。止十八品。未獲三身滅業障等六品。」とある。現在の大正大藏經第16巻にある『金光明經』曇無讖訳では19品となっており、最後に「囑累品」であるが、これは、同第16巻の『合部金光明經』最後にある闍那崛多訳の「付囑品」と内容が全く一致するものであり、後世に讖訳18品に付加されたものと考えられ、言うまでも無く讖訳は18品である。

- 7) 前掲同書457頁下段より引用。

- 8) 『開元釋教錄』卷第七(大正55巻)545頁A段より引用。開元年中(8世紀頃)にも、既に5巻本が明確に伝わっていなかった事が分かる。

- 9) 前掲同書550頁C段中より引用。

- 10) 前掲同書554頁A段後より引用。

- 11) 前掲同書同頁A段中より引用。

- 12) 『註金光明最勝王經』(日藏方等部章疏1)の457頁下段中より引用。

- 13) 前掲同書457頁下段後半より引用。

- 14) 大正16巻、359頁b段後半より引用。

- 15) 大正39巻、182頁A段中頃より引用。

- 16) 大正55巻、550頁C段後半より引用。

- 17) 大正39巻、160頁B段後半と162頁A段末より引用。尚、四巻經、七巻經という表現は、同じく『金光明經疏』の別の箇所にも見られる。

- 18) 大正39巻、179頁後半に

依古釋者。傳真諦云。外國言修跋擊此曰金。婆頗婆此曰光。鬱多摩此言明。因陀羅此曰帝。邏闍那此曰王。故西土出本云佛陀經金光明經帝王經也。此意佛陀經從所詮為名金光明法喻合名亦從功用號帝王經。

とある。以上より推察して、真諦訳は『金光明帝王經』7巻22品であったと考えられる。

- 19) 真諦訳の全ては現存しないが、「三身分別品」「業障滅品」「陀羅尼最淨地品」「依空滿願品」の4品は『合部金光明經』(大正16巻)中に残っている。尚、真諦は西インド優禅尼(Ujjayani)の出身であり、南海を経て中国に入り、『攝大乘論』『轉識論』『仁王般若經』等49部142巻の訳經をしている。また真

諦は太建元年（569）正月11日に71歳で遷化しているから、生年は499年となる。真諦については、『開元釋教録』（大正55巻、538頁B段～C段、546頁A段～C段）に詳しく記されている。

20) 『註金光明最勝王經』（日藏方等部章疏1）の458頁前半より引用。

21) 闍那耶舎については、『開元釋教録』（大正55巻、545頁A段中）に

沙門闍那耶舎。周言藏稱亦曰勝名。中印度摩伽陀國人。專修宴坐妙窟定業。共二弟子耶舎崛多闍那崛多。以武帝保定四年甲申。至建德年壬申。為大冢宰晉蕩公宇文護。於長安舊城四天王寺。譯大乘同性經等六部。桂國平高公侯伏壽為總監檢校。

とあり、『大乘同性經』『大雲請雨經』等、6部15巻を訳出している。

22) 『開元釋教録』（大正55巻、550頁C段後半、548頁B段末）には

隋代志徳、復出銀主陀羅尼品及囑累品。…
…金光明經銀主陀羅尼品囑累品一卷。曇無讖出四巻真諦七巻周世崛多五巻並無此二品。檢梵本有故復出之見長房録後十七年沙門寶貴取前後譯合成八巻故不別存。

とある。また、闍那崛多については、同書545頁B段に

沙門闍那崛多。周志徳北印度健達國人。師從同遊來達茲境。以武帝時於四天王寺。譯金色仙人問經。後隨譙王宇文儉住益州。於龍淵寺復譯普門偈等三部。崛多入隋更廣翻譯。

とあり、43部197巻の翻訳を行っている。尚、崛多の入手した梵本については、同書550頁A段末に詳しく

沙門明穆彦琮重對梵本再審覆勘整理文義。崛多曾傳。于填東南二千餘里有遮拘迦國。彼王純信敬重大乘。宮中自有摩訶般若大集經華嚴三部大經並十萬偈。王躬受持…（中略）…此國東南二十餘里山甚巖險。有深淨窟置大乘華嚴方等寶積楞伽方廣舍利弗華聚二陀羅尼都薩羅藏摩訶般若八部般若大雲經等凡十二部。咸十萬偈。

また、同書549頁C段中に

以武平六年相結同行採經西域。往返七載將事東歸。凡獲梵本二百六十部迴至突。

とあり、この梵本が西域で得られたものである事が分かる。したがって、「銀主陀羅尼品」「囑累品」は、他の梵本に見られないことより、北部インド、西域で金光明經の中に取り入れられた可能性がある。

また、闍那崛多の翻經事業に際しては、同書550頁A段後半に

仍勅崛多專主翻譯。移法席就大興善寺。更召婆羅門沙門達磨笈多并勅高天奴高和仁兄弟等傳梵語。又增置十大德沙門僧休法聚法經慧藏洪遵慧遠法纂僧暉明穆曇暹等。監掌翻事銓定宗旨。沙門明穆彦琮重對梵本再審覆勘整理文義。

とある如く、以上のスタッフによって行われ、明穆、彦琮が中心になり、慧遠なども参加していたことが分かる。

23) 寶貴については、前掲同書550頁C段中に

沙門釋寶貴。大興善寺僧也。開皇十七年丁巳合金光明經一部。貴即周世智度論師道安之神足。

とあり、（道安とは北周時代『二教論』等を記した道安のことである。）『合部金光明經』の序を彦琮が製している。

24) 『註金光明最勝王經』（日本大藏經方等部章疏1）の458頁下段より引用。

25) 大正39巻、180頁B段前半より引用。

26) 大正55巻、567頁A段中より引用。

27) 前掲同書568頁B段後半より引用。

28) 勝莊には『金光明最勝王經疏』8巻があったが現存しない。しかし、『金光明最勝王經玄樞』（願曉撰）・『金光明最勝王經註釋』（明一撰）・『最勝王經羽足』（平備撰）・『註金光明最勝王經』（常騰撰）等の日本における註釈書には、かなり勝莊の疏が引用されており、これらを見ることによって勝莊の解釈の内容の幾分かを知ることができる。

29) 利貞には、『最勝王經纂決』3巻（現存せず）があったとされ、慧沼には『金光明最勝王經疏』10巻（大正39巻）がある。いづれも義浄が本經を訳したつたすぐ後に書かれたものと思われる。特に、金岡秀友氏が（『金光明經の研究』p19）で指摘しているとおり、慧沼は梵本と義浄訳『金光明最勝王經』を対照した上で自ら註釈を著している。尚、梵本の偈頌に関する慧沼の言及は『金光明最勝王經疏』（大正39巻、235頁A段～B段中）に見られる。

金光明經の教学史的展開について

30) 本經の翻訳異本については『合部金光明經序』(彦琮述・大正16巻・359頁b段)、『金光明最勝王經疏』(慧沼撰・大正39巻、182頁A段)、『金光明最勝王經註釋』(明一集・大正56巻、717頁B段)、『金光明最勝王經玄樞』(願暎撰・大正56巻、491頁B段)等に詳しく記されているが、常騰の疏の方が簡明であったので、本論ではそれを中心に用いた。

31) 真諦訳の「三身分別品」には
一切如来有三種身。菩薩摩訶薩皆應當知。何者為三。一者化身。二者應身。三者法身。如是三身攝受阿耨多羅三藐三菩提。

(大正16巻、362頁C段中)

とあり、義浄訳の「分別三身品」でも同様に、
善男子 一切如来有三種身云。何為三。一者化身 二者應身 三者法身。如是三身具足攝受阿耨多羅三藐三菩提。

(大正16巻、408頁B段中)

とある如く、化身 應身 法身の三身説があげられている。これについて金岡秀友氏は、これら三身は定義の上で(これら三身については、同巻408頁B・C段に詳しい。) 化身が内容上(Nirmāṇakāya) 応化身に対応し、 應身が(Sambhogākāya) 受用身(報身)に対応するものであることを指摘している。(『金光明經の研究』p73~75参照) また、同氏は、この三身説と『大乘莊嚴經論』「菩提品」に説かれる三身論と比較することによって、この三身品が弥勒と同時代かむしろそれ以降の時代に成立したことを指摘している。(同書p75~83参照)

こういった三身論の思想的萌芽は、『解深密經』「如来成所作事品第八」(大正16巻、708頁B段中)に説かれた解脱身・化身といった仏身論に見られると考えられているが、さらにそこから後の『莊嚴經論』また本經に説かれる三身説に至る(弥勒、無著、世親等の造作の經典に説かれる三身説などの)展開の詳細な検討が今後の課題になるように思われる。

32) 曇無讖訳「功德天品」の陀羅尼は、(大正第16巻、345頁中段に)の如くであり、『合部金光明經』「功德天品」にある2呪の陀羅尼は、

(A呪) 娑梨富樓那遮利 三曼陀達舍尼 摩訶毘阿羅伽帝 三曼陀毘那伽帝 摩訶伽梨波帝 波婆彌 薩婆多三曼陀修鉢梨富隸 阿夜那達摩帝 摩

訶毘鼓畢帝 摩訶彌勒鞞僧祇帝 醯帝徒三博祇希帝 三曼陀阿吽 阿菟婆羅尼

(B呪) 哆姪吽 娑梨富樓那遮利 三曼陀達舍尼 摩訶毘阿羅伽帝 三曼陀毘那伽帝 摩訶迦葉梨耶波利波羅波彌薩婆利陀 三曼多修鉢利帝 富隸那阿夜那達摩多摩訶俱畢帝 摩訶彌勒帝 盧鞞僧祇帝 醯帝徒僧祇希帝 三曼陀遏吽何菟波羅尼莎波訶
(大正16巻、388頁B段中)にある。また義浄訳『金光明最勝王經』の「大吉祥天女增長財物品」の陀羅尼は、(大正16巻、439頁C段)にある。

33) 『合部金光明經』(功德天品)のA・B陀羅尼は、前掲の如くであるが、尚このB呪の前に

此下呪八行新翻出還是功德天説與舊呪不同不知何者是非故並寫出之

(大正16巻、388頁B段中)

という添書があるので、恐らくは闍那崛多が見い出した梵本にあったので、後に挿入されたものと考えられる。

また、B呪と義浄訳「大吉祥天女增長財物品」に説かれる陀羅尼呪との共通点は、両呪それぞれの前に、仏名を称えることが示されている点である。つまりB呪の前には「南無一切三世佛。南無一切諸菩薩...云々。」(同書388頁B段中)とあり、後者の呪の前にも「南謨一切十方三世諸佛 南謨寶髻佛 南謨無垢光明寶幢佛...云々。」(同書439頁B段中)とある。即ち、両呪とも称仏名敬礼の後に唱えられる陀羅尼として位置づけられている。しかし、識訳「功德天品」の陀羅尼とA呪陀羅尼の前には、一切仏名が記されておらず、やはり内容上役割の異なった陀羅尼であることが分かる。

34) 氏家覚勝氏の説によれば、大乘經典に説かれる陀羅尼は、本来憶持としての仏の教説を聴聞記憶する能力を示し、まさに見仏を目的とする意味が強かったが、後に真言神呪化することによって、所謂三密成就の即身成仏を可能にする作仏としての真言陀羅尼へと変換してゆくということである。また、6世紀以前の雑密經典の神呪は、除災与楽の現世利益を目的とするのに対して、7世紀以降の純密經典の真言は成仏(成正覺)を内容とするようになるという点も兼ねて指摘しておられる。(『陀羅尼の世界』P18~25参照)ここで、そういった大乘陀羅尼から真言

陀羅尼への展開を考えれば、本経「功德天品」の陀羅尼も、このことに呼応していると思われる。A呪には、単に懺悔から除災与楽的な意味としての役割があるのに対して、B呪には(もちろん、除災与楽的な意味もあるが)「定成就句 眞實之句」「令所望求速得成就」「願出生死速得解脱」(大正16巻、439頁C段中)といった語句が内容に見られるように、この陀羅尼の役割が単なる現世利益だけを目的とするのではなく、さらにそれ以上の作仏としての意味も含まれつつあることが分かる。(もちろん、本経は完全な純密經典ではないのであるが)このことは、B呪がA呪よりも眞言陀羅尼的要素を強くもっているものと考えてよいと思われる。

- 35) 渡辺海旭氏は、本経を密教經典として位置づけたが(『壺月全集』上巻「純密教としての金光明経」、728~738頁参照) 金岡秀友氏は、本経はあくまでも密教經典ではなく、純粹な大乘經典である(『金光明経の研究』P3~7参照)と指摘され、また岩本裕氏も本経は梵語原典に関するかぎり密教經典とするには問題がある(仏教聖典選第4巻、「金光明経解題」、120頁参照)と指摘されている。
- 36) 識訳4巻本『金光明経』には、それほど密教的色彩は見られないが、義浄訳10巻本『金光明最勝王経』に至ると、多分に雑密的色彩をもつようになる。もちろん、そこには陀羅尼の導入と展開が大きく関わっているのであるが、ちょうど義浄訳が成立する直後、善無畏(7世紀~8世紀)によって『大日経』『蘇悉地経』が、不空(8世紀)によって『金剛頂経』がそれぞれ翻訳されることとなる。そういった純密經典成立直前の雑密的經典として本経がある。
- 37) 尚、この「功德天品」に説かれたA呪については、『陀羅尼集経』巻第十にある「功德天法一卷」内に全く同じ陀羅尼が見られる。(大正18巻、875頁A段中)この『陀羅尼集経』とは、唐代永徽5年(654)に阿地瞿多(Atikūṭa)が『金剛大道場経』(散失)より抄訳して12巻にまとめたものである。しかもそこにある「功德天法一卷」は、識訳4巻本中の「功德天品」全体の経文を、そっくりそのまま用い、そこに新たに功德天の12印相を付加したものにすぎない。恐らくは、この「功德天品」が、インド、西域において功德天(吉祥天)の信仰と相俟って発展し、

そこに印相なども付加され密教の中に取り入れられたのであろう。それは「功德天法一卷」に

中天竺國菩提僧阿難律木叉師迦葉師等共置多法師於經行寺翻流行於唐國。(大正18巻、874頁B段)

とある如く、この「功德天法」が『金剛大道場経』とは別に翻訳され、『陀羅尼集経』に編入された(『開元釋教録』阿地瞿多の条項、大正55巻、562頁C段中参照)ことから推察される。また、この功德天の密教的修法が唐代流行したことも見逃してはなるまい。

- 38) 『開元釋教録』(大正55巻、538頁C段中)には、「復有金光明疏等六部二十六卷。並是真諦所撰亦並刪之。」とあり、『義天録』(同巻、1170頁A段)には、「金光明経疏六卷 眞諦述」とある。ところが、『東域傳燈目錄』(同巻、1153頁B段)には、「金光明経義疏七卷 内題云金光明文句七卷眞諦三蔵法師」とある如く、確かに眞諦の疏はあったが、それが6巻か7巻かは不明である。
- 39) 尚、日本には天平勝宝4年(752)には、この眞諦撰『金光明経疏』7巻(現存せず)が伝わっていた(石田茂作編『奈良朝現在一切経疏目録』、103頁中)ようであり、常騰の『註金光明最勝王経』(日藏方等部章疏1、525頁上段等)や平備の『最勝王経羽足』(大正56巻、807頁B段中)などに眞諦の疏文が引用されていることから、当時の金光明経研究の参考とされていたことが分かる。
- 40) 註22参照。尚、『開元釋教録』(大正55巻、550頁A段)によると、慧遠がこの翻訳に参加したのは、開皇12年(592)であり、この年慧遠は69歳で示寂している。
- 41) この『金光明経義疏』については、『東域傳燈目錄』(大正55巻、1153頁B段)に記載されているだけで現存せず、内容は全く分からない。
- 42) 『諸宗章疏録』(大日本佛教全書第95巻、69頁A段)には、「金光明経疏一卷 或為二巻。吉蔵述」とあり、現存の『金光明経疏』(大正39巻、160頁)は1巻である。また、『金光明最勝王経玄樞』(大正56巻、483頁C段)には、「一依三乗解。莊法師等。二依一乗釋。嘉祥等也。」とある如く、吉蔵の註釈を一乗的立場の解釈として評価し、これを多く引用してい

金光明經の教学史的展開について

- る。
- 43) 註17参照。吉蔵の『金光明經疏』は識訳4巻本を底本とし、真諦7巻本を参考にしたものである。
- 44) 『金光明經玄義』と『金光明經文句』については、『東域傳燈目錄』(大正55巻、1153頁B段)などに見られる。『金光明經疏』については、『諸宗章疏録』(大日佛第95巻、68頁上段)に見られるが現存せず不明である。また『金光明經儀法』については、『國清百録』巻第1(大正46巻、796頁A段)にその儀文がみられる。
- 45) 所謂、天台三大部(『法華玄義』・『法華文句』・『摩訶止観』)が、従来智顛撰とされてきたが、実際は智顛の講義を門弟の灌頂が筆録し、整理や修治を重ねて成立したものであるように、これら本經に関する註釈書も灌頂がまとめ、後に完成したものといえる。
- 46) この志徳撰『金光明經疏』については、『東域傳燈目錄』(大正55巻、1153頁B段中)に見られ、『奈良朝現在一切經疏目錄』103頁にも、天平宝字7年(763)に我国に伝わっていたことが記されている。また、『註金光明最勝王經』(日藏方等部章疏1、482頁下段など)には、「志徳師云...。」という如く、所処に志徳述の經疏からの引用と思われるものが見られる。
- 47) 『開元釋教録』(大正55巻、549頁A段)より引用。
- 48) 『東域傳燈目錄』(大正55巻、1153頁B段)には、「金光明經疏十巻 合為五巻。寶積寺沙門道宣撰」とある。この寶積寺がどこにあったのかは不明であるが、貞觀19年(645)に玄奘の弘福寺の翻訳に参加する以前は、中国各地を遊學したようであるから、恐らく唐が成立してまもない頃、寶積寺という寺院で撰述したものと思われる。
- 49) 『義天録』(大正55巻、1170頁B段中には、「金光明經疏三巻 玄暢述」とあり、『東域傳燈目錄』(大正同巻、1153頁B～C段)には、「金鼓合部經疏三巻 玄暢述七巻經云合部」とある如く、玄暢の本經疏は真諦7巻本の註釈であることがわかる。
- 50) 註27～29参照。勝莊の本經疏については、『東域傳燈目錄』(大正同巻、1153頁C段)に、
最勝王經疏八巻 又云述記寶積房口二欠轉經院大薦福寺勝莊師撰
- 右一部仁壽元年五月二十一日權少僧都道雄申請官載以華嚴宗之疏而所釋義依法相宗矣。
とあり、現存しないが、當時法相宗の立場での解釈として流布していたことが分かる。
- 慧沼の本經疏については、『諸宗章疏録』(大日佛書95巻、70頁中段)に「最勝王經疏六巻 慧沼述」とあり、大正39巻にも『金光明最勝王經疏』(10巻)として現存している。尚、本来は6巻であるが、巻第2から巻第5までが、本末2本に分けられているので、全部で10巻本となり大正大藏經では10巻として現存している。
- 利貞の本經註釈については、常騰の『註金光明最勝王經』(日藏方等部章疏1)に「纂決云」或いは「如纂決」というように多くの箇所から引用されている。また同書58頁下段に「纂決三巻 利貞撰」とあり、『東域傳燈目錄』(大正同巻、1153頁C段)にも「最勝王經纂決三巻 分為六巻擬撰未見」とある。
- 有則の本經註釈については、『義天録』(大正55巻、1170頁B段)に「金光明經疏十巻 有則述」とある。『東域傳燈目錄』(大正同巻、1153頁C段)に「最勝王經正辨一卷 有則」とあり、『諸宗章疏録』(大日佛諸95巻、77頁中段)にも「最勝正辨 闕卷数。有則述」とある如く、奈良朝には日本に伝わっており、有則は唐代の人物と推測される。
- 51) 『宋高僧傳』(大正50巻、750頁C段)の「靈光寺皓端傳」には
端依附之果了一心三觀。遂撰金光明經隨文釋十巻由是兩宗法要一徑路通。忠獻王錢氏借賜紫衣。別署大德號崇法焉。
とある。
- 52) この山家山外論争の展開については、『中国天台史』(武覺超著、叡山学院)の75頁以下に詳しいので参照。
- 53) 『諸宗章疏録』(大日佛書95巻、81頁下段)には、寶雲義通の著述として「觀經疏記 光明玄贊釋 光明句備急鈔」の三部があげられているが現存しない。
- 54) 『諸宗章疏録』(前掲同頁中段)には、広経澄或の著述として「光明玄金鼓記 十疑論註一卷」などがあげられているが、唯一『十疑論註』(1巻)だけが、元統藏經2・12・4に現存し、これは太平興國8年(983)に撰述されたものであるため、恐らく『光明

玄金鼓記』もその頃の作と思われる。

- 55) 晤恩の『金光明玄義発揮記』は現存しないが、知禮が『釈難扶宗記』(元統蔵経1・95・4、46頁上段後半)や『四明十義書』(大正46巻、832頁C段)において晤恩の『発揮記』を批判している。
- 56) 『諸宗章疏録』(大日佛書95巻、81頁中段)には、「靈光洪敏 光明玄義記」とあるだけで内容については全く分からない。尚、洪敏が『光明玄義記』を著述したのは、確かではないが984年から1007年頃と思われる。(『中国天台史』122頁参照)
- 57) 『諸宗章疏録』(前掲同書、81頁下段)の孤山智圓の項に、「索隱記四巻 釋光明文句。表微記一卷 釋光明玄義。」とある。両本とも1018年に智圓が著したものとされるが、現存しない。(『中国天台史』134頁参照)
- 58) 『中国天台史』84～87頁参照。
- 59) 『金光明經玄義拾遺記』と『金光明經文句記』は大正39巻にあり、『金光明最勝懺儀』は大正46巻(961頁以下)にあるが、これは國清百録にある金光明懺法を補足したものである。『光明玄当体章問答偈』は大正46巻(『教行録』巻第三、876頁)にあるが、これは慈雲遵式が問者に、四明知禮が答者になり、金光明經で説かれる法性についての問答をした偈文である。
- 60) 『義天録』(大正55巻、1170頁B段)には「(金光明經)文句科二巻。玄義科一卷 玄義拾遺記三巻 釋難扶宗記一卷 十義書五巻 已上 知禮述」とあり、『四明十義書』(大正46巻、831頁)は全三巻であるから、ここにある『金光明經十義書』(5巻)とは別のものと思われる。また『釋難扶宗記』(1巻)は、元統蔵経1・95・4にある。尚、『諸宗章疏録』(大日佛書95巻、81頁下段)に、四明知禮の著述として「光明玄續遺記三巻」があげられているが、『玄義拾遺記』(6巻)と同内容か)不明である。
- 61) 『金光明玄義文句科』は天保三年刊本として(立大・A11・230・231、正大・1172・29)にあり、『佛書解説辞典』参照)『金光明經懺法補助儀』は大正46巻(957頁)にあるが、これは知禮の『金光明最勝懺儀』に比べて、國清百録にある『金光明懺法』をさらに補足し完成したものである。尚、『金光明護国儀』と『金光明經王章』は現存しない。
- (『諸宗章疏録』・『中国天台史』116頁参照)
- 62) 尚賢は知禮の弟子であり、『光明玄闡幽志』があったとされるが現存せず不明である。繼忠は尚賢の弟子であり、『義天録』(大正55巻、1170頁中段)には『金光明經科』(1巻)があったとされるが現存しない。從義は繼忠の弟子であるが、後に知禮の山家教学に真向から反対したので、彼は特に雑伝派と呼ばれている。彼の『金光明玄義順正記』と『金光明經文句新記』は元統蔵経第20巻にあり、『順正記』の序文には元禮7年(1084)とあるので、元禮年間(1078～1084)に撰述されたものと思われる。(同経同巻、300頁A段参照)また、如湛にも『光明玄義護国記』があったとされるが現存せず、宗暁の『金光明經照解』は元統蔵経第20巻、478頁以下にある。尚、『中国天台史』146頁以下を参照。
- 63) 『義天録』(大正55巻、1170頁参照)。尚、『義天録』は1090年撰述されるので、これらは1090年以前の著述と思われるが、『諸宗章疏録』(914年撰)や『東域傳燈目錄』(1094年撰)には、一切これらの題目は見られないから、恐らく唐代末より宋代にかけて撰述されたものと思われるが、もしかすると、これらは朝鮮撰述かもしれない。(不明)
- 64) 明得の『金光明經玄義科』、『金光明經文句科』、『金光明經玄義拾遺記會本』(6巻)、『金光明經文句文句記會本』(8巻)は、元統蔵経第20巻にある。また受汰の『金光明經科註』も同経同巻にあり、その578頁下段には、「明 監官安國寺比丘 受汰 重輯... (中略)...余自崇禎辛未冬日既集科注以疏解經王矣。」とあるから、おそらく崇禎4年(1631)年頃に受汰が撰述したものと思われる。
- 65) 『朝鮮仏教史』(鎌田茂雄著)264頁参照。百座講会では、所謂護国三部經(『金光明經』『仁王經』『法華經』)が転読され、天部、八部神衆の護国を仰ぎ乞い、厄難、疫病から王室、国民が守られるよう国家の安泰が祈願された。(『韓国仏教儀礼の研究』79頁参照)
- 66) 『東域傳燈目錄』(大正55巻、1153頁B段)には、「金光明經疏八巻 元暁 外題云金光明經疏内題云金鼓經疏」とある。また、この元暁の本經疏は既に天平15年(743)には我国に伝わっているが現存しない。(『奈良朝現在一切經疏目錄』103頁参照)

金光明經の教学史的展開について

- 67) 憬興については『朝鮮仏教史』91頁参照。『東域傳燈目錄』(大正55巻、1153B段)には、「金鼓經疏一卷 興師可詳」「最勝王經略贊五巻 憬興興師先撰金光明經述贊」とあり、『義天録』(同巻、1170頁B段)には、「金光明經述贊七巻 憬興述」「金光明經略意一卷 憬興」とある。恐らく『金鼓經疏』(1巻)と『金光明略意』(1巻)は同じものと思われる。また、『金光明最勝王經略贊』(5巻)は、別名『金光明最勝王經疏』(5巻)とも呼ばれ、天平12年(740)には我国に伝来している。(『奈良朝現在一切經疏目録』104頁参照)尚、これら憬興の本經疏は散失し現存しない。
- 68) 遁倫については、あまり知られていないが、1933年、中国山西省趙城県広勝寺舍利塔内より発見された『瑜伽論記』には、「海東興倫寺遁倫」とありその刊記によれば、慈恩大師基の弟子とされている。(『仏教史料としての金刻蔵經』塚本善隆著、『東方学報』京都第6冊、1936年2月)また、『朝鮮仏教史』93頁参照。
- 69) 『義天録』(大正55巻、1170頁B段)には、「金光明經略記一卷 遁倫述」とあるが現存しない。
- 70) 『朝鮮仏教史』89頁参照。また、『韓国仏書解題辞典』(国書刊行会、昭和57年8月)65頁参照。
- 71) 『義天録』(大正55巻、1170頁B段)には、「金光明經述記四巻 太賢述」「金光明經料簡一卷 太賢述」とあるが現存しない。尚、『奈良朝現在一切經疏目録』(104頁)より、天平17年(745)に太賢の『最勝王經料簡』1巻が日本に伝わっていたことが分かる。
- 72) 『日本書紀・下』578頁12行目(井上光貞著、中央公論社、昭和62年11月)より引用。
- 73) 本經の転読、誦經、講説など年代順にあげると次のようになる。
- 天武8年(680)5月、金光明經を宮中と諸寺とで説く。(前掲『日本書紀・下』332頁参照)
- 朱鳥元年(686)7月丙午(8日)、一百の僧を招き金光明經を宮中で読ませた。(前掲同書、361頁参照)
- 持統6年(692)閏5月丁酉(3日)、京師および四畿内に金光明經を講説させた。(前掲同書、388頁参照)

持統8年(694)5月癸巳(11日)、金光明經一百部を諸国に送って安置し、必ず毎年正月の上玄(8日)に講読させる。(前掲同書、395頁参照)

ところが、『天平勘録法隆寺流記資財帳』天平19年(747)の条には

金光明經壹部八巻
右甲午飛鳥淨御原宮御宇天皇請坐者
(『法隆寺史料集成』第1巻16頁より引用)

とあり、ここにある金光明經は識訳4巻本ではなく、實貴編『合部金光明經』8巻と思われる。「甲午飛鳥淨御原宮御宇天皇」とは、持統天皇8年のことであるから、この年の5月に諸国に送られた100部の經典は『合部金光明經』であると推測される。もしかすると、この頃『合部金光明經』が我国に伝わり、新たに100部製され諸国に配布されたのかも知れない。

持統10年(696)12月、金光明經を読むため、毎年12月の晦日に、行ないの淨らかな者10人を得度させることとした。(前掲『日本書紀・下』、400頁参照)

大宝2年(702)12月乙巳(13)、畿内4ヶ国に命じて金光明經を講義させた。(『続日本紀1』39頁参照、直木孝次郎編、1986年6月、平凡社)

大宝3年(703)7月壬寅(13日)、四大寺(大宮、薬師、元興、弘福)で金光明經を読ませる。(前掲同書、59頁参照)

慶雲2年(705)4月壬子(3日)、氣候不順凶作のため五大寺(前の四大寺と法隆寺)で金光明經を読ませる。(前掲同書、66頁参照)

神龜2年(725)7月戊戌(17日)金光明經か最勝王經を転読させ国家平安を祈らせる。(前掲同書、271頁参照)

神龜5年(728)12月己丑(28日)『最勝王經』640巻を全国に配布され、国家安泰を祈らせる。(前掲同書、298頁参照)

天平9年(737)8月癸卯(2日)、畿内4ヶ国二監及び七道の諸国に命令し、僧侶は沐浴して身を淨め1ヶ月の内に2・3回最勝王經を読誦させる。(『続日本紀2』48頁参照、直木孝次郎編、1986年6月、平凡社)

同年同月丙辰(15日)天下太平、国土安寧のため、

宮中15ヶ所において僧侶700人を招いて大般若經と最勝王經を転読させ400人を出家させる。畿内4ヶ国、七道の諸国でも578人出家。(前掲同書、52頁参照)

同年10月丙寅(26日)大極殿で金光明最勝王經を講義させる。律師道慈が講師、堅蔵が読師、聴聞俗人100人、沙弥100人。(前掲同書、53頁参照)
天平10年(738)4月乙卯(17日)国家を栄え且つ平穩であるようにするため京と畿内七道の諸国に3日間、最勝王經を転読させる。(前掲同書、61頁参照)

天平13年(741)3月乙巳(24日)僧尼は毎月8日最勝王經を転読する。「国分寺建立の詔」(前掲同書、90頁参照)

天平15年(743)正月癸丑(13日)金光明最勝王經を読ませるために、多くの僧を金光明寺(東大寺)に招く。天皇は49人の大徳に相談する。「正月14日を以て国中の出家の人たちに要請して住んでいる処で49(七々)日を限って金光明最勝王經を転読させる。また49日間、殺生を禁断す。大養徳国金光明寺(東大寺)で法会をする。今は像法の中興である。」と天皇は詔りした。(前掲同書、108頁参照)

天平17年(745)5月己未(2日)地震有り。都(平城京)の諸寺に命じ最勝王經を7日間を限り転読させる。(前掲同書、135頁参照)

天平勝宝元年(749)正月丙寅(元旦)元日より49(七々)日の間、天下の諸寺に命じて悔過を行い、金光明經を転読させる。(前掲同書、164頁参照)

同年4月甲午(1日)天下の諸寺に最勝王經を置き、盧舎那仏を造らせる。(前掲同書、164頁参照)

74)『續日本紀』卷10、神亀5年(728)12月己丑(28日)の条には

金光明經六十四帙六百四十卷頒於諸国。々別十卷。先是諸国所有金光明經。或國八卷。或國四卷。至是写修頒下。隨經到日。即令轉讀。為令国家平安也。

(『国史大系第2巻・續日本紀』、114頁より引用。)とある如く、これ以前には、4巻本、8巻本が共に

流布していたことが分かる。尚、義浄新訳10巻本が我国へいつ伝来したかについては、井上薫氏が指摘されているとおり、養老2年(718)大安寺道慈が唐より帰朝した時に招来したと考えられ(井上薫著、『日本古代の政治と宗教』-「道慈」-、昭和36年7月、吉川弘文館、を参照)、続日本紀に初めて『最勝王經』が出てくるのは、神亀2年(725)のことである(前註73の参照)ことからしても、この728年を期に義浄訳『金光明最勝王經』10巻本が全国に行きわたるのである。

75)『国史大系第2巻・續日本紀』、135頁より引用。

76)註73の参照。大安寺道慈(～744)は三論宗の第3伝といわれる学僧であり、大宝2年(702)に入唐した長安の西明寺に止住したとされ(翌703には、この西明寺で義浄は新訳『金光明最勝王經』を翻訳している)養老2年(718)に帰国し大安寺に住している。彼は日本書紀編纂事業に参加し、欽明13年10月条仏教伝来の記載などを筆録しているが、当時の唐代仏教の影響を日本にもたらした人物の一人といえる。(「道慈」-『日本古代の政治と宗教』所収を参照)

77)『續日本紀』卷14(『国史大系第2巻・續日本紀』164頁)には

宜令天下諸国各敬造七重塔一區。并写金光明最勝王經。妙法蓮華經各一部。朕又別擬写金字金光明最勝王經。每塔各令置一部。所聖法之盛。...(中略)...僧寺必令有廿僧。其寺名為金光明四天王護國之寺。尼寺一十尼。其寺名為法華滅罪之寺。...(中略)...毎月八日必應轉讀最勝王經。每至月半。誦戒羯磨。毎月六齋日公私不得漁獵殺生。

とあるが、これは言うまでもなく本經受持の功德により、国家安泰を願うものである。これは『金光明最勝王經』の内容には至る処に、經典受持する者には一切の厄難が消滅し、最上の安樂が得られることが説かれているが(特に『四天王護国品』には顕著に見られるが)例えば『分別三身品』には、經典受持のみならず、經典講読の利益として国王の軍衆強盛にして、諸の怨敵無く、疫病を離れ、寿命を延長し、吉祥安樂にして正法興顯する。中宮・妃后・王子・諸臣・和悦して諍うことなく、佞を離れて、王に愛重される。沙門・婆羅門及び諸国人、

金光明經の教学史的展開について

- 正法を修行して病なく安樂にして、狂死者なく諸の福用に於て悉く皆修立する。三時中、四大調適し常に諸天に増加守護され、慈悲等しく傷害の心なく、諸衆生三宝に帰依し、皆願って菩提の行を修習する。(大正16巻、411頁A段)などの4つがあげられている。こういった經典の功德力によって国家安泰を願うとするのが、護国仏教の特色といえる。
- 78) 『日本仏教史2』(田村圓澄著、昭和58年9月、法蔵館)所収「国分寺の創建」26頁参照。
- 79) 『諸宗章疏録』(大日佛書95巻、77頁下段)には「最勝遊心決三巻 善珠述 最勝題記一卷 善珠述」とあるが現存しない。
- 80) 『奈良朝仏教史の研究』(井上薫著、昭和61年1月、吉川弘文館)155頁以下参照。
- 81) 大正56巻、717頁以下に現存。尚、『諸宗章疏録』(大日佛書95巻、77頁下段)には、「最勝註十巻、東大寺明一述」とある。
- 82) 大正56巻、717頁A段より引用。
- 83) 行信については、佐伯良謙著『法隆寺行信僧都に就いて』(仏書研究第12号・大正4年8月)を参照。また、行信の弟子に孝仁がいる。天平勝宝2年(750)入寂。
- 84) 薬師寺僧行信は、厭魅した罪により天平勝宝6年(754)に下野薬師寺に流された。(『国史大系第2巻・續日本紀』222頁、天平勝宝6年11月甲申の条参照。)
- 85) 『諸宗章疏録』(大日佛書95巻、77頁下段)に「最勝音義一卷 行信述」とあるが現存しない。尚、『奈良朝現在一切經疏目録』(104頁)には、『金鼓經音義』(1巻・撰者不明)が天平20年(748)にあったとされる。
- 86) 『日藏方等部章疏第1』、453頁以下にある。尚、常騰以後、西大寺においては本經は重要視された。鎌倉期には尊壽によって最勝王經の講説が盛んになされ、その頃の「最勝王經法則」「表白、神分」が残っている。『日藏方等部章疏第1』511~514頁参照。
- 87) 前掲同書、453頁以下『註金光明最勝王經』を参照。尚、安国、薦福については全く不明である。
- 88) 『諸宗章疏録』(大日佛書95巻、77頁中段)には、「最勝解節記六巻、護命述釋沼疏」とあり、恐らくは慧沼の經疏の註釈であったと思われるが現存せず。
- 89) 『東域傳燈目録』(大正55巻、1153頁C段)には、「最勝玄樞十巻 元興寺願曉撰三論」とある。尚、大正56巻、483頁以下にある。
- 90) 大正56巻、483頁B段中より引用。
- 91) 前掲同巻、483頁C段より引用。
- 92) 914年頃撰述された『諸宗章疏録』(大日佛書95巻、77頁下段)には、「最勝羽足一卷 平備述 最勝調度四巻 平備述 但不出名」とあるから、平備は914年より以前の人であり、平安初期の人物と推測される。生没年代は不明。
- 93) 『東域傳燈目録』(大正55巻、1153頁C段)には、「最勝王經羽足一卷 平備和」、「最勝王經調度四巻 元興平備髓 不出名」とあり、大正56巻、807頁以下に『最勝王經羽足』はあるが、『最勝王經調度』は現存しない。
- 94) 尚、寶師、備師という名が出てくるが、この兩者については全く不明。
- 95) 『諸宗章疏録』(大日佛書95巻)91頁下段参照。『最勝王經解題』と『最勝王經伽陀』は、大正56巻、824頁以下にあるが、『最勝王經略釋』は現存しない。
- 96) 『最勝王經解題』(大正56巻、824頁C段)には、「今所謂金光明最勝王經。能示此理趣覺悟諸衆生。即是諸佛之秘寶衆經之密藏。」とあり、以下經題の名義を真言密教的に解釈している。(同巻、824頁参照。)
- 97) 『東域傳燈目録』大正55巻、1153頁参照。『諸宗章疏録』大日佛書95巻、84頁参照。これらの解釈の内、現存するのは、『金光明長講會式』(大正74巻、256頁以下)だけである。
- 98) 前掲と同様に『東域傳燈目録』(同巻、1153頁)、『諸宗章疏録』(同巻、85頁)参照。尚、これら3本はすべて現存しないが、『本朝台祖撰述密部書目』などによると『最勝王經疏』『最勝王經文句』の兩本ともに巻数に異説がある。
- 99) 現存しない。『本朝台祖撰述密部書目』参照。
- 100) 『日藏方等部章疏2』にある。尚、これは『金光明玄義』(智顛説)の要略としての抄釈である。
- 101) 大日佛書31巻にある。
- 102) 大日佛書 解題2、224頁参照。

藤谷厚生

- 103 現存する。『佛書解説大辞典』及び『大日本佛教全書續刊予定書目』参照。
- 104 略釋は仁和寺に古写本として残っている。『佛書解説大辞典』参照。
- 105 『諸宗章疏録』巻3、真言宗章疏録（大日佛書95巻、93頁）参照。
- 106 『佛書解説大辞典』によると、刊本（龍大、2417・72）が現存するらしい。尚、實乗については生没不明である。恐らく宋より帰朝した際に知禮の『拾遺記』を将来したのであろうか？今後の研究を待つ。
- 107 現存する。『佛書解説大辞典』及び『大日本佛教全書續刊予定書目』参照。西大寺では、觀尊が、最勝王經の講説を盛んにしているから、恐らくその時の

- 聽聞であろう。註86参照。
- 108 『佛書解説大辞典』によると、寶曆10年（1760）刊行の刊本（高大・寄・1・32）が現存するらしい。
- 109 『拾遺記探蹟』は、『日藏方等部章疏2』に所載。
- 110 『真宗全書62巻』にある。『本願寺通記』参照。
- 111 『佛書解説大辞典』によると、享保2年（1717）の写本（谷大・餘大3521）が現存するらしい。
- 112 『佛書解説大辞典』によると、写本（正大1172・15）が現存するらしい。
- 113 大安は真宗僧か。『佛書解説大辞典』によると、写本（龍大・2417・67）が現存するらしい。『佛書解説大辞典』参照。

（図1）金光明經における陀羅尼の展開

曇無讖 （四卷本） 〔420年頃〕	真谛 （七卷本） 〔550年頃〕	闍那崛多の 入手梵本 〔590年頃〕	義浄 （十卷本） 〔703年〕
「功德天品」 （1）	「陀羅尼最浄地品」 （10）	（A呪） （B呪） 「大弁天品」 （5） 「銀主陀羅尼品」 （1）	「大吉祥天女増長財物品」 （1） 「最浄地陀羅尼品」 （10） 「大弁才天女品」 （5） 「無汚著陀羅尼品」 （1） 「金勝陀羅尼品」 （1） 「四天王護国品」 （4） 「如意宝珠品」 （7） 「堅牢地神品」 （3） 「僧慎爾耶藥叉大将品」 （1） 「長者子流水品」 （2）

（ ）内の数字は陀羅尼の呪数を示す

金光明經の教學史的展開について

(別表1) 金光明經の展開

梵本 (parivarta)	金光明經・四卷本 曇無讖 (420年頃)	金光明帝王經 真諦・七卷本 (550年頃)	耶舍崛多・五卷本 (周武帝560-578)	闍那崛多の 入手本 (590年頃)	合部金光明經 至貴・八卷本 (703年)	金光明最勝王經 義淨・十卷本 (703年)
1) Nidāna	1) 序品	1) 序品	1) 序品	1)	1) 序品	1) 序品
2) Jñātagatāyuhpramāṇanirdeśa	2) 寿量品	2) 寿量品	2) 寿量品(広演)	2)	2) 寿量品	2) 如来寿量品
3) Svapna	3) 懺悔品	3) 三身分別品	3) 夢金數品	3) ?	3) 三身分別品	3) 分別三身品
4) Deśana	4) 懺悔品	4) 懺悔品	4) 懺悔品	4)	4) 懺悔品	4) 夢見金數懺悔品
5) Kamalākaraśarvataḥāgatastava	4) 讚歎品	5) 業障減品	5) 讚歎品	5)	5) 業障減品	5) 滅業障品
6) Śūnyatā	5) 空品	6) 陀羅尼最淨地品	6) 空品	6) ?	6) 陀羅尼最淨地品	6) 最淨地陀羅尼品
7) Caturmahārāja	6) 四天王品	7) 讚歎品	7) 四天王品	7)	7) 讚歎品	7) 蓮華輪讚品
8) Sarasvatidevī	7) 空品	8) 空品	8) 空品	8)	8) 空品	8) 金勝陀羅尼品
9) Śrīmahadevī	8) 功徳天品	9) 依空滿願品	9) 功徳天品	9) ?	9) 依空滿願品	9) 重顯空性品
10) Sarvabuddhabodhisattvanāmasaṃdharāṇī	9) 聖牢地神品	10) 四天王品	10) 四天王品	10)	10) 四天王品	10) 依空滿願品
11) Dhāpṛthivīdevatā	10) 聖牢地神品	11) 大弁天品	11) 大弁天品(広演)	11) 銀主陀羅尼品	11) 銀主陀羅尼品	11) 四天王觀察人天品
12) Saṃjñeya	11) 正論品	12) 功徳天品	12) 功徳天品	12)	12) 大弁天品	12) 四天王護國品
13) Devendrasamaya	12) 壽集品	13) 聖牢地神品	13) 聖牢地神品	13)	13) 功徳天品	13) 無汚著陀羅尼品
14) Śusambhava	13) 鬼神品	14) 散脂鬼神品	14) 散脂鬼神品	14)	14) 聖牢地神品	14) 如意宝珠品
15) Yakṣīśrayarakṣī	14) 授記品	15) 正論品	15) 散脂鬼神品	15)	15) 散脂鬼神品	15) 大弁才天女品
16) Daśadevaputraśahasraṣṭyakaraṇa	15) 除病品	16) 壽集品	16) 正論品	16)	16) 正論品	16) 大吉祥天女品
17) Vyādhiprakāśamaṇa	16) 流水長者子品	17) 鬼神品	17) 壽集品	17)	17) 壽集品	17) 大吉祥天女增長財物品
18) Jñānavāhaṃsya matsyavaineya	17) 捨身品	18) 授記品	18) 鬼神品	18)	18) 鬼神品	18) 聖牢地神品
19) Vyāghri	18) 讚歎品	19) 除病品	19) 授記品	19)	19) 授記品	19) 增讚爾耶葉叉大将品
20) Śarvatathāgatastava	18) 讚歎品	20) 流水長者子品	20) 除病品	20)	20) 除病品	20) 正法正論品
		21) 捨身品	21) 流水長者子品	21)	21) 流水長者子品	21) 養生王品
		22) 讚歎品	22) 現寶塔品	22)	22) 捨身品	22) 諸天葉叉護持品
			23) 讚歎品	23)	23) 讚歎品	23) 授記品
				24) 輝累品	24) 讚歎品	24) 除病品
					25) 長者子品	25) 長者子流水品
					26) 捨身品	26) 捨身品
					27) 十方菩薩讚歎品	27) 十方菩薩讚歎品
					28) 妙幢菩薩讚歎品	28) 妙幢菩薩讚歎品
					29) 菩提樹神讚歎品	29) 菩提樹神讚歎品
					30) 大弁才天女讚歎品	30) 大弁才天女讚歎品
					31) 附屬品	31) 附屬品

(別表2) 金光明經關係著述一覽

《中国撰述》

題 名	年 代	卷 数 (存欠)	撰 者
金光明經	412 ~ 421	4 卷18品存	曇無讖
金光明帝王經	552 ~ 554	7 卷22品欠	真諦
金光明經疏 (文句)	"	6 卷か 7 卷欠	真諦
金光明更广大弁才陀羅尼經	561 ~ 578	5 卷20品欠	耶舍崛多
金光明經義疏	523 ~ 592	1 卷欠	慧遠
金光明經疏	549 ~ 623	1 卷存	吉蔵
金光明經玄義	597年頃	2 卷存	灌頂・智顛説
金光明經文句	"	6 卷存	"
金光明經懺法	"	1 卷存	"
金光明經疏	"	3 卷欠	"
金光明經疏	6 c後半	8 卷欠	志徳 (闍那崛多?)
合部金光明經	597年	8 卷24品存	寶貴・彦琮
金光明經疏	630 ~ 667	10卷欠	道宣
合部金光明經疏	700年以前	3 卷内 1 卷存	玄暢
金光明最勝王經	703年	10卷31品存	義淨
金光明最勝王經疏	703年頃	8 卷欠	勝莊
金光明最勝王經疏	714年	10卷存	慧沼
最勝王經纂決	703年頃	3 卷か 2 卷欠	利貞
金光明經疏	唐代 (不詳)	10卷欠	有則
金光明經隨文釋	890 ~ 961	10卷欠	皓端
金光明玄贊釋	927 ~ 988	不明・欠	義通 (山家)
金光明文句備急鈔	"	"	"
光明玄金鼓記	983年頃	不明・欠	澄或 (山家)
金光明玄義發揮記	912 ~ 986	不明・欠	晤恩 (山外)
光明玄義記	984 ~ 1007	不明・欠	洪敏 (山外)
光明玄義表微記	1018年	1 卷欠	智圓 (山外)
光明文句索隱記	"	4卷欠	"
金光明經玄義拾遺記	1023年	6 卷欠	知禮 (山家)
金光明經文句記	1027年	6 卷存	"
金光明經十義書	960 ~ 1028	5 卷欠	"
金光明經釋難扶宗記	"	1 卷欠	"
光明玄續遺記	"	3 卷欠	"
金光明最勝懺儀	"	1 卷存	"
金光明文句記科	"	2 卷欠	"

金光明經の教学史的展開について

題名	年代	巻数(存欠)	撰者
金光明玄義科	960～1028	1巻欠	知禮(山家)
光明玄当体章問答偈	"	1巻存	"
金光明護国儀	963～1032	1巻欠	遵式(山家)
金光明經王章	"	不明・欠	"
金光明玄義文句科	"	1巻存	"
金光明經懺法補助儀	"	1巻存	"
光明玄闡幽志	～1028～	不明・欠	尚賢(山家)
金光明經科	1011～1082	1巻欠	繼忠(山家)
金光明玄義順正記	1078年	3巻存	從義(雑伝)
金光明經文句新記	1042～1091	7巻存	"
光明玄義護国記	1100～1149	4巻欠	如湛(山家)
金光明經照解	1190～1194	2巻存	宗暁(山家)
金光明王解	不明(1090年迄)	1巻欠	靈鑑
金光明經科文	"	4巻欠	智昭
金光明經弁正鈔	"	7巻欠	"
金光明經述記	"	3巻欠	靈順
金光明經疏	"	4巻欠	驚韶
金光明經文句科	1531～1588	1巻存	明得
金光明經玄義科	"	1巻存	"
金光明科註	明代(15c～17c)	4巻存	受汰

《朝鮮撰述》

題名	年代	巻数(存欠)	撰者
金光明經疏	617年頃	8巻欠	元暁
金鼓經疏	681年頃	1巻欠	興師(憬興)
金光明經略意	"	1巻欠	憬興
金光明經述贊	"	7巻欠	"
金光明最勝王經略贊	703年頃	5巻欠	"
金光明最勝王經疏	"	5巻欠(同上か?)	"
金光明經略記	700年頃?	1巻か3巻欠	遁倫
金光明經述記	753年頃	4巻欠	太賢
金光明經料簡	"	1巻欠	"

《日本撰述》

題名	年代	巻数(存欠)	撰者
最勝王經遊心決	724～797	3巻欠	善珠
最勝題記	"	1巻欠	"
金光明最勝王經註釋	728～798	10巻存	明一

題名	年代	巻数(存欠)	撰者
最勝王経音義	729～748	1巻欠	行信
金光明最勝王経註	740～815	10巻存	常騰
最勝王経解節記	750～830	6巻欠	護命
金光明開發(開題)	767～822	1巻欠	最澄
金光明経註釋	"	5巻欠	"
金光明経雜義	"	1巻欠	"
金光明文句	"	3巻欠	"
金光明釋題名	"	1巻欠	"
金光明経料簡	"	1巻欠	"
金光明長講會式	"	1巻存	"
金光明最勝王経開題	774～835	1巻存	空海
最勝王経伽陀	"	1巻存	"
最勝王経略釋	"	1巻欠	"
金光明文句	814～891	4巻(10巻)欠	円珍
金光明最勝王経疏	"	4巻(5か10巻)欠	"
金光明経開題	"	2巻欠	"
金光明最勝王経玄樞	835～871	10巻存	願暁
最勝王経羽足	9c～10c(不詳)	1巻存	平備
最勝王経調度	"	4巻欠	"
最勝王経開題	942～1017	1巻欠	源信
金光明玄義略抄	1177～1180	1巻存	證真
最勝問答抄	1155～1213	10巻存	貞慶等
金光明経品釋	～1202～	1巻存	良算
最勝王経略釋	13c頃	1巻存	聖禅
最勝王経開題愚艸	1226～1304	1巻欠	頼瑜
金光明経玄義拾遺記會本	1260年頃	3巻存	実乗
金光明経聴聞抄	1231～1316	1巻存	信空
最勝王経開題抄	1345～1416	1冊存	宥快
最勝王経開題聞書	1446年	1帖(写)存	不明
最勝王経如意宝珠真言	室町時代	1幅存	不明
金光明最勝王経疏會本	1706年刊	6巻存	不明
金光明玄義拾遺記探蹟	1716～1735	2巻存	亮潤
金光明経考	1711～1763	1巻存	泰巖
金光明経玄義記聞書	1751～1763年頃	4巻存	守篤本純
金光明経玄義拾遺記聞書	1780～1862	1巻存	慧澄癡空
金光明経文句記會本	1832年刊	8巻存	不明
金光明最勝王経王法正論品聴記	1806～1883	1巻存	大安